

講義資料

<http://conf.msl.titech.ac.jp/Lecture/>

# 統計力学・半導体

フロンティア材料研究所 神谷利夫

元素戦略研究センター 松石 聰

# 課題

$f(x) = \exp(x) + x - 0$  の解を二分法を使って解け。

Excelなどを使ってもいいし、pythonなどのプログラムを作ってもよい。

余力があれば、Newton-Raphson法でも解いてみるといい。

参考：

<http://conf.msl.titech.ac.jp/Lecture/>

- 計算材料学特論 資料

PowerPointのプレゼンテーションファイルにして提出

期限：今日の17:00までに

できたところまで可

# 教科書

阿部 龍藏 著

熱統計力学

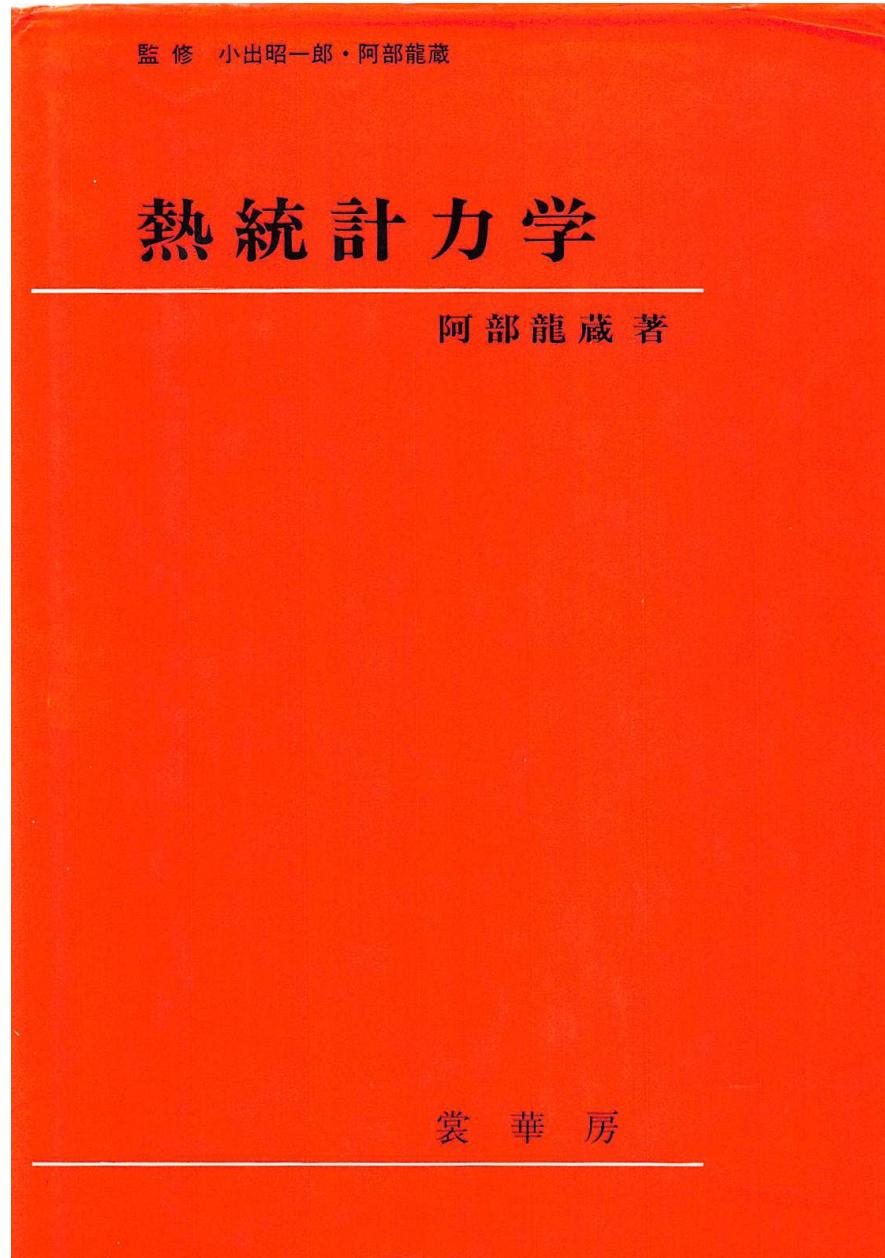
裳華房 (1995/03)

¥ 2,800 + 税

ISBN-10: 4785320605

ISBN-13: 978-4785320607

1. 热力学第一法則
2. 热力学第二法則
3. 分子運動論
4. 热平衡系の古典統計力学
5. 古典統計力学の応用
6. 正準集団と大正準集団
7. 热平衡系の量子統計力学
8. 理想フェルミ気体
9. 理想ボース気体



# 統計力学

# 分布関数から物理量を求める方法

- 分布関数  $f(E_i)$  はエネルギー  $E_i$  の固有状態が粒子で占有される割合  $N_{\text{occupied}}$

$$N_{\text{occupied},i} = f(E_i)$$

- 一つの状態にたかだか1つの粒子しか入れないとして  
平均粒子数を計算した結果 : Fermi-Dirac分布
- 一つの状態に入れる粒子数に制限がないとして  
平均粒子数を計算した結果 : Bose-Einstein分布
- 一般的な場合 : 正準分布、大正準分布

(1) 分配関数や自由エネルギーの微分として物理量を導出する

**Helmholtzエネルギー**  $F = -Nk_B T \ln Z$  (4.41)

**平均エネルギー**  $E = -N \frac{d \ln Z}{d(1/k_B T)}$  (4.34)

**(平均) 粒子数  $N$**   $\frac{dZ}{de_i} = -\frac{1}{k_B T} \sum_i \exp(-e_i / k_B T) = -\frac{1}{k_B T} N$

(2) 分布関数(占有割合)を使って物理量の統計平均を直接導出する

$$P = \sum_i P_i f(E_i) = \int P(\mathbf{r}, \mathbf{p}) \cdot f(E) d\mathbf{r} d\mathbf{p} = \int P(E) \cdot D(E) f(E) dE$$

# 統計分布関数と $\mu$ の意味

Maxwellの速度分布関数: 古典力学、理想気体、空間の等方性から導出

$$f(v)drdv = \rho \left( \frac{m}{2\pi k_B T} \right)^{3/2} \exp \left( -\frac{mv^2}{2k_B T} \right) drdv \quad (3.29)$$

Maxwell-Boltzmann分布: 等重率の原理、最大確率の分布

$$f(E) = Z^{-1} \exp \left( -\frac{E}{k_B T} \right) = \exp(-[E - \mu]/k_B T) \quad (4.29)$$

(大)正準分布: 一般化された統計分布、すべての基本、M-B分布と同じ形

Fermi-Dirac分布: スピンが半整数(波動関数が粒子の交換で反対称)の粒子(電子)

$$f(E) = \frac{1}{\exp[(E - \mu)/k_B T] + 1} \quad (8.5)$$

Bose-Einstein分布: スpinが整数(波動関数が粒子の交換で対称)の粒子

$$f(E) = \frac{1}{\exp[(E - \mu)/k_B T] - 1} \quad (7.20) \quad (^4\text{He}, \text{スpinのない原子核})$$

Planck分布: スpinが整数、波動関数が対称の粒子で、粒子数が保存されない

$$f(E) = \frac{1}{\exp[E/k_B T] - 1} \quad (7.21) \quad (\text{光子、フォノン})$$

$\mu$ : 化学ポテンシャル(電子を扱う場合は、フェルミエネルギー  $E_F$ )  
全粒子数  $N$  の条件から決められる

$$N = \sum f(E_i) = \int D(E) f(E) dE$$

# 分布関数から物理量を求める手順

1. 全粒子数  $\Rightarrow \mu$  を決定

$$N = \sum_i f(E_i) = \int f(\mathbf{r}, \mathbf{p}) d\mathbf{r} d\mathbf{p} = \int D(E) f(E) dE$$

2. 全エネルギーを計算

$$E = \sum_i E_i f(E_i) = \int E(\mathbf{r}, \mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{r}, \mathbf{p}) d\mathbf{r} d\mathbf{p} = \int E D(E) f(E) dE$$

3a. 統計平均として物理量  $P$  を導出

$$P = \sum_i P_i f(E_i) = \int P(\mathbf{r}, \mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{r}, \mathbf{p}) d\mathbf{r} d\mathbf{p} = \int P(E) D(E) f(E) dE$$

3b. 分配関数 (状態和) の微分として物理量を導出

平均エネルギー       $\frac{d}{d(1/k_B T)} \ln Z = - \sum \frac{E_i \exp(-E_i/k_B T)}{Z} = -\langle E \rangle \quad (4.34)$

(平均) 粒子数  $\langle N \rangle$        $\frac{d}{dE_i} \ln Z = -\frac{1}{k_B T} \sum \exp(-E_i/k_B T) / Z = -\frac{1}{k_B T} \langle N \rangle$

(平均) 分極  $\langle \mu \rangle$        $\frac{d}{dB} \ln Z = \frac{1}{k_B T} \sum \mu_i \exp(+\mu_i B/k_B T) / Z = \frac{1}{k_B T} \langle \mu \rangle$

3c. 自由エネルギーの微分として物理量を導出

Helmholtzエネルギー       $F = -N k_B T \ln Z \quad (4.41)$

体積弾性率  $B_V$ :  $F = F_0 + (1/2)B_V(V/V_0)^2 \rightarrow B_V = d^2F/d(V/V_0)^2$

# 「100人を部屋に集めてお金をランダムな相手に渡し続ける」とだんだんと貧富の差が生まれる

2017/9/11 Gigazine

<http://gigazine.net/news/20170711-random-people-give-money-to-random-other-people/>

100ドルを持った100人を1つの部屋に集めて、それぞれ無作為に選ばれた人に1ドルを渡したらどうなるか。

=> お金を渡す機会が増えれば増えるほど偏り、つまりは貧富の差が生まれる。

\$45を持った45人でスタートした例:

51

51回

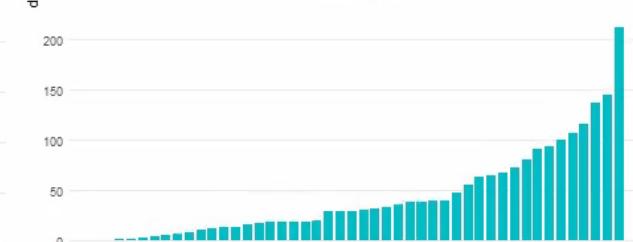
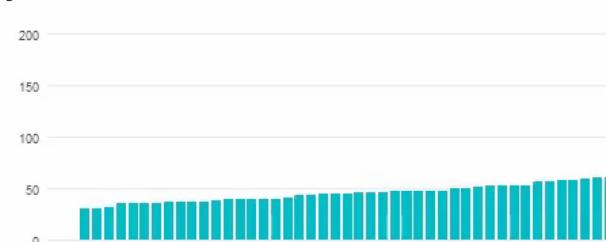
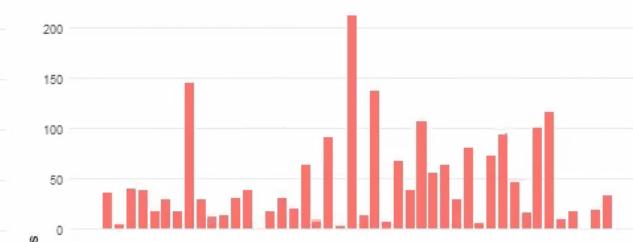
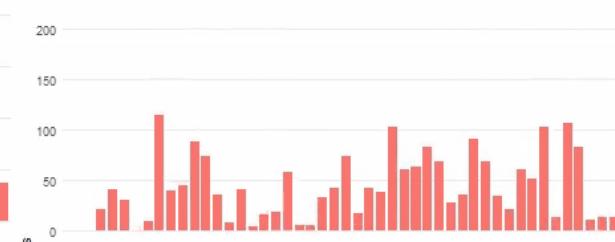
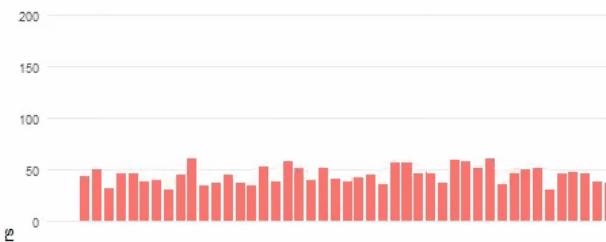
Ordered by person

1233 1233回

Ordered by rank

4944 4944回

Ordered by person



# 「100人を部屋に集めてお金をランダムな相手に渡し続ける」とだんだんと貧富の差が生まれる

Pythonプログラム: **randomtrade.py**

<http://conf.msl.titech.ac.jp/Lecture/StatisticsC/index.html>

pythonのインストール (英語):

<http://conf.msl.titech.ac.jp/Lecture/python/InstallPython/InstallPython.html>

使い方: 引数無しで **python randomtrade.py** を実行すると、Usageを表示

python randomtrade.py npersons value(average) vtrade n(maxiteration) n(plotinterval) n(distribution func)

**使用例: python randomtrade.py 200 50 1 10000 100 21**

200人が、最初に50ドルずつもっていて、1ドルずつ交換を10000回行う。

100サイクルごとにグラフを更新。

分布関数の横軸は、value(average)の10倍の範囲を21分割する。

**実行例: python randomtrade.py 2000 50 1 100000 100 21**

上段: それぞれの保有金額

中段: 保有金額順に並べ替えた結果

下段: 青線 金額に関する分布関数。

赤線 総数がnpersons、

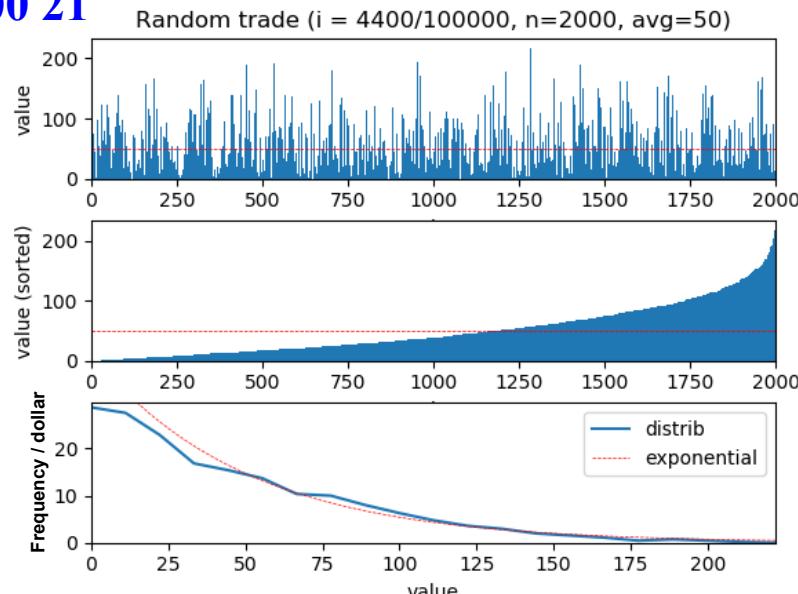
平均所有額  $v$  が value(average)になる

指数関数分布曲線  $f(v) = A \exp(-bv)$

$$b = 1 / \langle v \rangle \quad (\beta = 1 / k_B T \text{に対応})$$

$$A = Nb$$

右図は、4400回の交換サイクル終了時の結果



# 粒子の交換に対する波動関数の対称性

## ・量子力学の要請

- ボース粒子 : 粒子の交換に対する波動関数が対称

$$\psi = \psi_a(1)\psi_b(2) + \psi_a(2)\psi_b(1)$$

- フェルミ粒子: 粒子の交換に対する波動関数が反対称

$$\psi = \psi_a(1)\psi_b(2) - \psi_a(2)\psi_b(1)$$

## ・1と2が同じ状態を占める場合 ( $a = b$ )

- ボース粒子:  $\psi = 2\psi_a(1)\psi_a(2) \neq 0$  になる位置がある(物理的意味を持つ)

- 一つの1粒子状態を何個の粒子でも占めることができ

- フェルミ粒子: 常に  $\psi = 0$  (物理的意味を持たない)

- 一つの1粒子状態を占めることができるのは1個の粒子のみ (パウリの排他律)

## ・ $r$ で指定される1粒子状態を何個の粒子を占められるか

- ボース統計 :  $n_r = 0, 1, 2, \dots$  (7.7a)

- フェルミ統計 :  $n_r = 0, 1$  (7.7b)

- 全粒子数 :  $N = \sum_r n_r$  (7.8)

- 全エネルギー :  $E = \sum_r e_r n_r$  (7.9) (粒子が独立な場合)

## § 7.2 ボース分布とフェルミ分布

### 等重率(等確率)の原理 (エルゴード仮説)

古典統計: 孤立した平衡状態の系について、位相空間で一定のエネルギー幅  $\Delta E$  で同じ体積を占める微小状態はどれも等しい確率で現れる

量子統計: 不確定性原理のため、物理状態は位相空間の一点に定まらない。  
物理的状態は量子方程式の「固有状態」として決まる  
 $\Rightarrow$  すべてのエネルギー固有状態が等確率で出現する

- 1粒子状態のエネルギー準位が  
ほぼ一定のグループに分ける  
(古典統計力学での細胞に相当)
  - $i$ : グループ番号

1粒子状態のエネルギー準位



:

- 配置数  $W$  が最大になる  $g_i, n_i$ 
  - 制約条件

$$N = \sum_i n_i \quad (7.14a)$$

$$E = \sum_i e_i n_i \quad (7.14b)$$

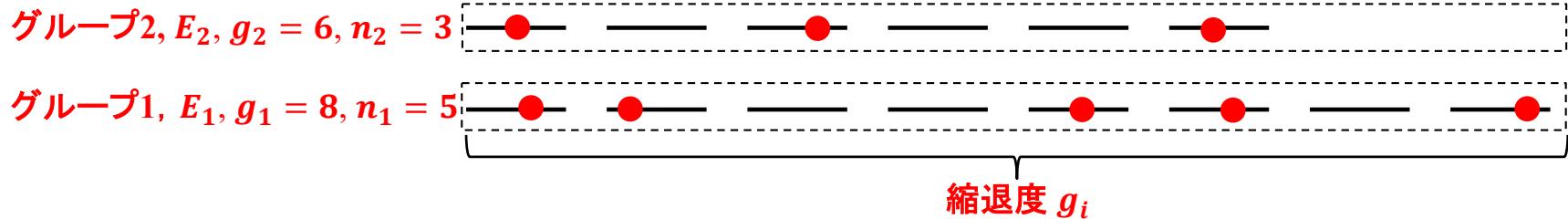
グループ  $i$

$e_i$ : エネルギー  
 $g_i$ : 準位数  
(縮重度)  
 $n_i$ : 粒子数

1

# Fermi-Dirac統計

$N$ 個の粒子が作る準位のグループ  $i = 1, 2, \dots$  (縮重度  $g_i$ ) を考える。  
準位のそれぞれに 0 個あるいは 1 個の粒子が入れる



$g_i$ 個の準位のうち、 $n_i$ 個の状態に電子を一つずつ入れる

グループ*i* 内の配置数:  $g_i$ 個から $n_i$ 個を選ぶ

$$W_i = {}_{g_i}C_{n_i} = \frac{g_i!}{n_i!(g_i-n_i)!} \quad (7.10)$$

$$\text{全グループの配置数: } W = \prod_i W_i = \prod_i \frac{g_i!}{n_i!(g_i-n_i)!} \quad (7.11)$$

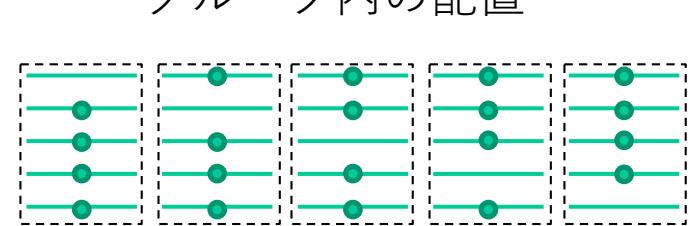
$$\begin{aligned} \ln W &= \sum_i \ln \frac{g_i!}{n_i!(g_i-n_i)!} \\ &= \sum_i [g_i \ln g_i - n_i \ln n_i - (g_i - n_i) \ln(g_i - n_i)] \quad (7.22) \end{aligned}$$

Stirlingの公式:  $g_i! \sim g_i(\ln g_i - 1)$

全エネルギー  $E$ 、全粒子数  $N$  の制約を未定乗数法で入れて最大配置数の分布をとる:

$$\frac{n_i}{g_i} = \frac{1}{e^{\alpha + \beta e_i} + 1}$$

(7.26) Fermi-Dirac分布 (Fermi分布)



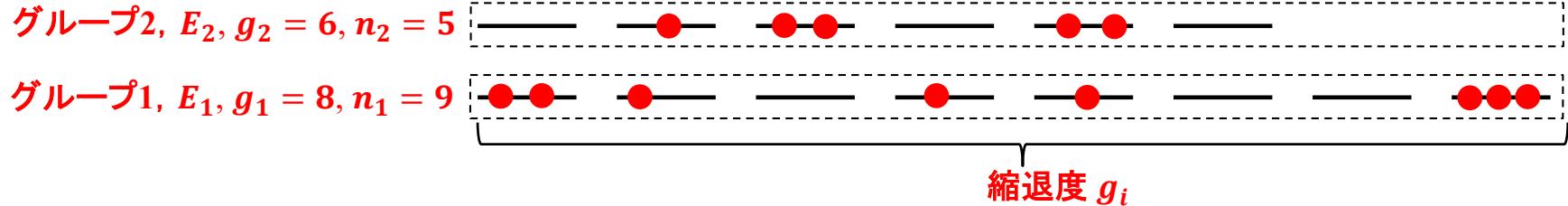
グループ内の配置  
 $g_i = 5, n_i = 4$ の場合

$$\frac{5!}{4!(5-4)!} = \frac{5 \cdot 4 \cdot 3 \cdot 2 \cdot 1}{4 \cdot 3 \cdot 2 \cdot 1} = 5$$

# Bose-Einstein統計

$N$ 個の粒子が作る準位のグループ  $i = 1, 2, \dots$  (縮重度  $g_i$ ) を考える。

準位のそれぞれに 0 個以上の粒子が入れる



重複組合せの場合の数を数える: <https://mathtrain.jp/tyohukuc>

ゼロから学ぶ統計力学、加藤岳生 (講談社 2013) p.92~

グループ内の配置数

$g_i$  個の準位に  $n_i$  個を配置する (同じ準位に複数配置できる)

=>  $n_i$  個の粒子を並べ、 $g_i$  個のグループに分ける。

=>  $n_i$  個の粒子と  $(g_i - 1)$  個の仕切りを並べることと等価

$$W_i = g_i H_{n_i} = {}_{n_i+g_i-1}C_{n_i} = \frac{(g_i+n_i-1)!}{n_i!(g_i-1)!} \quad (7.13) \xrightarrow{g_i, n_i \gg 1} \prod_i \frac{(g_i+n_i)!}{n_i!g_i!}$$

# Bose-Einstein統計

$N$ 個の粒子が作る準位のグループ  $i = 1, 2, \dots$  (縮重度  $g_i$ ) を考える。

準位のそれぞれに 0 個以上の粒子が入れる

グループ2,  $E_2, g_2 = 6, n_2 = 5$



グループ1,  $E_1, g_1 = 8, n_1 = 9$



縮重度  $g_i$

グループ内の配置数

$g_i$  個の準位に  $n_i$  個を配置する (同じ準位に複数配置できる)

$$W_i = g_i H_{n_i} = {}_{n_i+g_i-1}C_{n_i} = \frac{(g_i+n_i-1)!}{n_i!(g_i-1)!} \quad (7.13) \quad \xrightarrow{g_i, n_i \gg 1} \quad \prod_i \frac{(g_i+n_i)!}{n_i! g_i!}$$

- 全体の配置数

- $W = \prod_i \frac{(g_i+n_i-1)!}{n_i!(g_i-1)!} \quad (7.13) \quad \xrightarrow{g_i, n_i \gg 1} \quad \prod_i \frac{(g_i+n_i)!}{n_i! g_i!}$

- $\ln W = \sum_i [\ln(g + n)! - \ln n! - \ln g!]$   
 $= \sum_i [(g + n) \ln(g + n) - n \ln n - g \ln g] \quad (7.15)$

- 制約条件

- 全エネルギー一定 :  $E = \sum e_i n_i$
- 全粒子数一定 :  $N = \sum n_i \quad (7.14)$

- ラグランジュの未定乗数法  $\Rightarrow n_i = g_i \frac{1}{e^{\alpha+\beta e_i} - 1} \quad (7.20)$

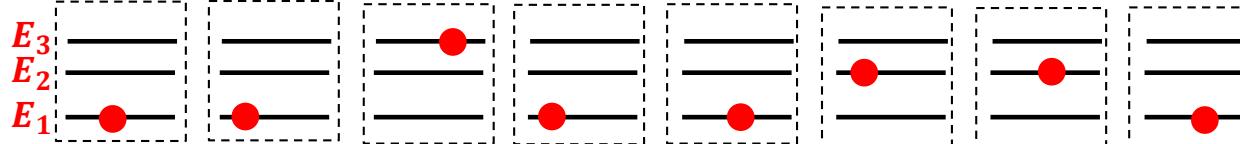
# 各種統計における粒子の可能な配置

Maxwell-Boltzmann統計、正準統計 => 試験によく出る。Isingモデルなど。

1個の粒子が複数の準位を作り、そのどれか1つの状態を取る。

$N_i$ のうち取りうる準位は $N_1+N_2+\cdots+N_{i-1}$ だけ減少。全粒子数の条件は未定乗数法で入る。

$$W = W_1 W_2 W_3 \cdots = \frac{N!}{N_1!(N-N_1)!} \frac{(N-N_1)!}{N_2!(N-N_1-N_2)!} \frac{(N-N_1-N_2)!}{N_3!(N-N_1-N_2-N_3)!} \cdots = \frac{N!}{N_1! N_2! N_3! \cdots}$$

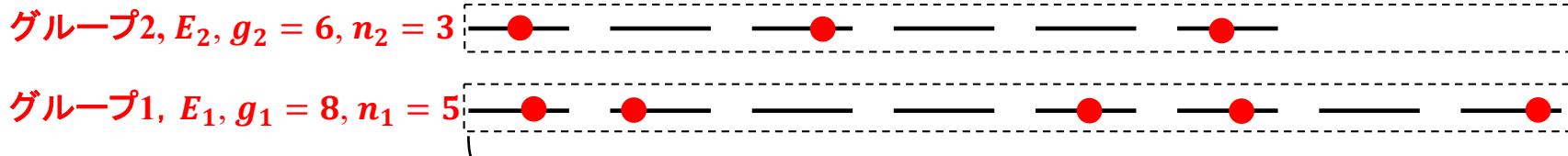


## Fermi-Dirac統計

$N$ 個の粒子が作る準位のそれぞれに0個あるいは1個の粒子が入れる。

$N_1, N_2, N_3, \dots$ に制約条件は入れる必要はない。全粒子数の条件は未定乗数法で入る。

$$W = W_1 W_2 W_3 \cdots = \frac{g_1!}{N_1!(g_1-N_1)!} \frac{g_2!}{N_2!(g_2-N_2)!} \frac{g_3!}{N_3!(g_3-N_3)!} \cdots = \prod_i \frac{g_i!}{N_i!(g_i-N_i)!}$$

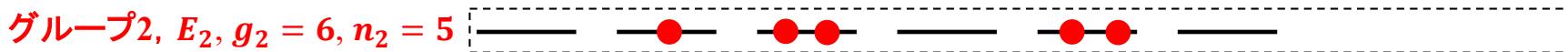


## Bose-Einstein統計

縮退度  $g_i$

$N$ 個の粒子が作る準位のそれぞれに0個以上の粒子が入る。全粒子数の条件は未定乗数法で入る

$$W = W_1 W_2 W_3 \cdots = \frac{(g_1+N_1-1)!}{N_1!(g_1-1)!} \frac{(g_2+N_2-1)!}{N_2!(g_2-1)!} \frac{(g_3+N_3-1)!}{N_3!(g_3-1)!} \cdots = \prod_i \frac{(g_i+N_i-1)!}{N_i!(g_i-1)!}$$



グループ1,  $E_1, g_1 = 8, n_1 = 9$

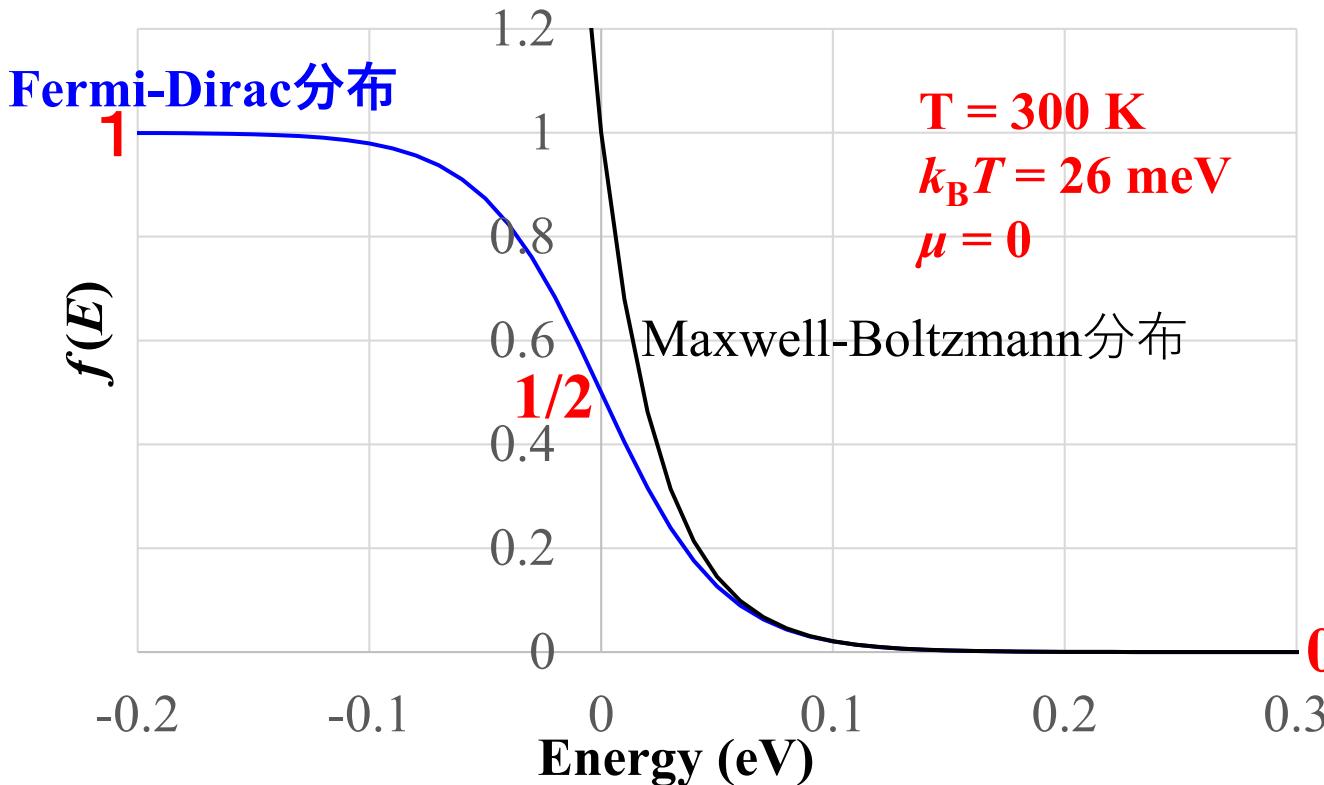
縮退度  $g_i$

# Fermi-Dirac分布関数

Fermi-Dirac分布:  $f(E) = \frac{1}{\exp[(E - \mu)/k_B T] + 1}$

- $E - \mu = 0$  で  $f(E) = 1/2$
- $E - \mu \Rightarrow -\infty$  で  $f(E) = 1$ : 絶対 0 K において、 $E < \mu$  の準位はすべて被占有
- $E - \mu \Rightarrow +\infty$  で  $f(E) = 0$ : 絶対 0 K において、 $E > \mu$  の準位はすべて非占有
- $(E - \mu) / k_B T \gg 1$  の場合: Maxwell-Boltzmann近似に漸近 (古典領域)

$$f(E) = \exp[-(E - \mu)/k_B T]$$

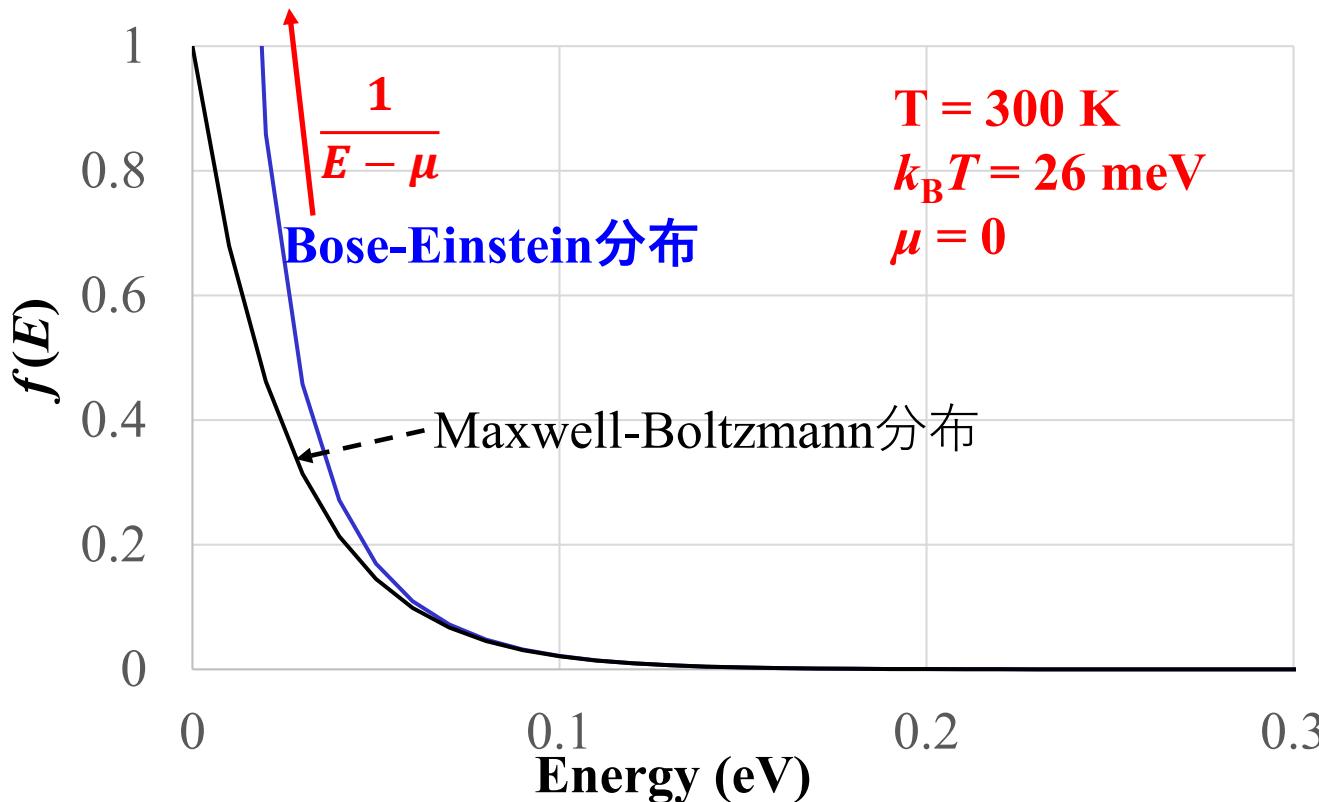


# Bose-Einstein分布関数

Bose-Einstein分布:  $f(E) = \frac{1}{\exp[(E - \mu)/k_B T] - 1}$

- $E \rightarrow \mu$  で  $(E - \mu)^{-1}$  に従って発散
- $f(E) \geq 0$  でなければいけないので、BE統計は、 $E > \mu$  のみで意味がある
- $(E - \mu) / k_B T \gg 1$  の場合: Maxwell-Boltzmann近似に漸近 (古典領域)

$$f(E) = \exp[-(E - \mu)/k_B T]$$



# 統計分布と物性: 半導体の場合

$$\text{FD分布: } f(E) = \frac{1}{\exp[(E - \mu)/k_B T] + 1}$$

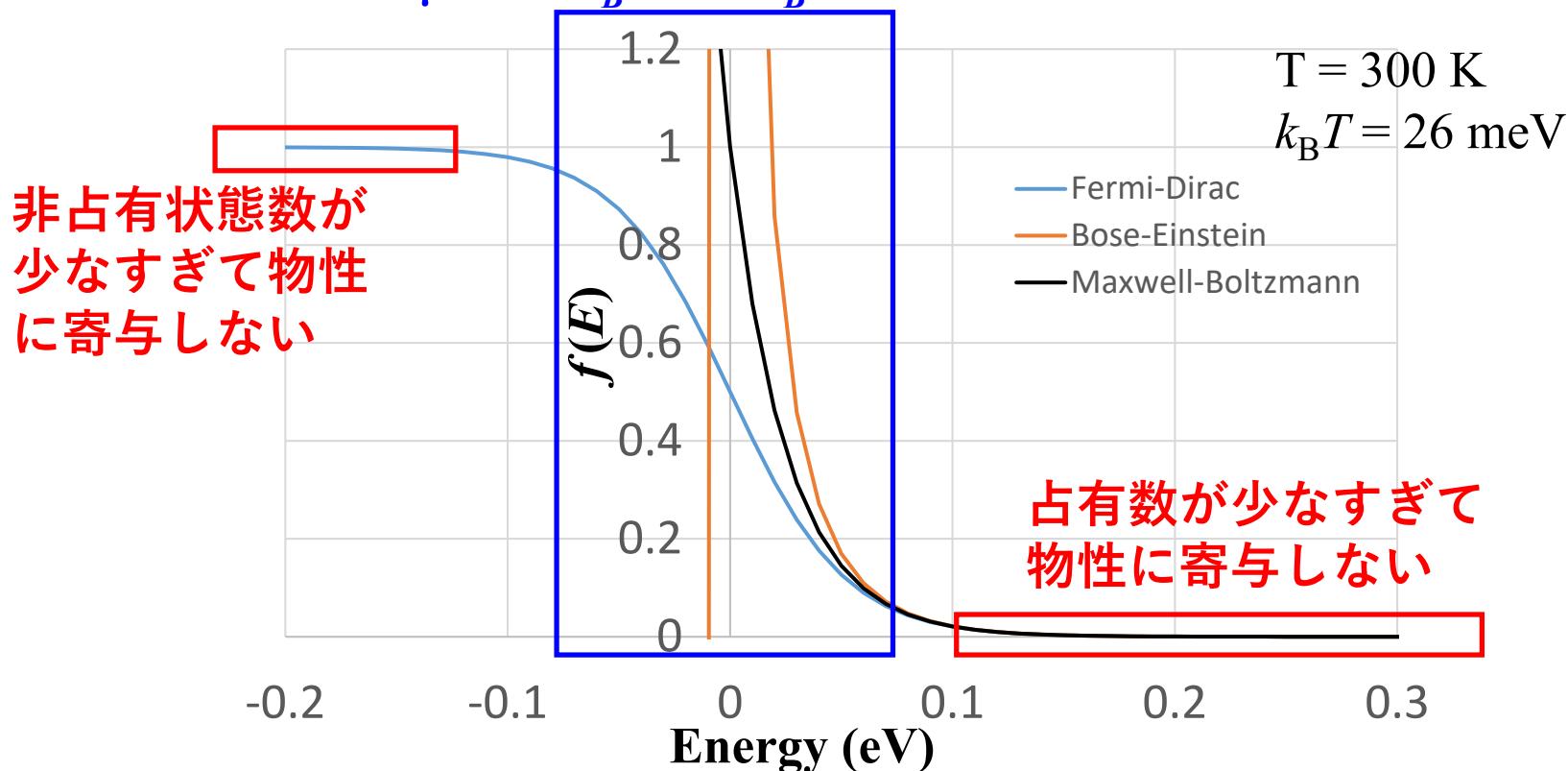
$$\text{BE分布: } f(E) = \frac{1}{\exp[(E - \mu)/k_B T] - 1}$$

$(E - \mu)/k_B T \gg 1$  の場合: Maxwell-Boltzmann 近似に漸近 (古典領域)

$$f(E) = \exp[-(E - \mu)/k_B T]$$

占有粒子が非占有状態に励起され、物性に寄与:

$\mu$  から  $k_B T \sim 3k_B T$  程度のエネルギー範囲



# 統計分布と物性:半導体の場合

$$\text{FD分布: } f(E) = \frac{1}{\exp[(E - \mu)/k_B T] + 1}$$

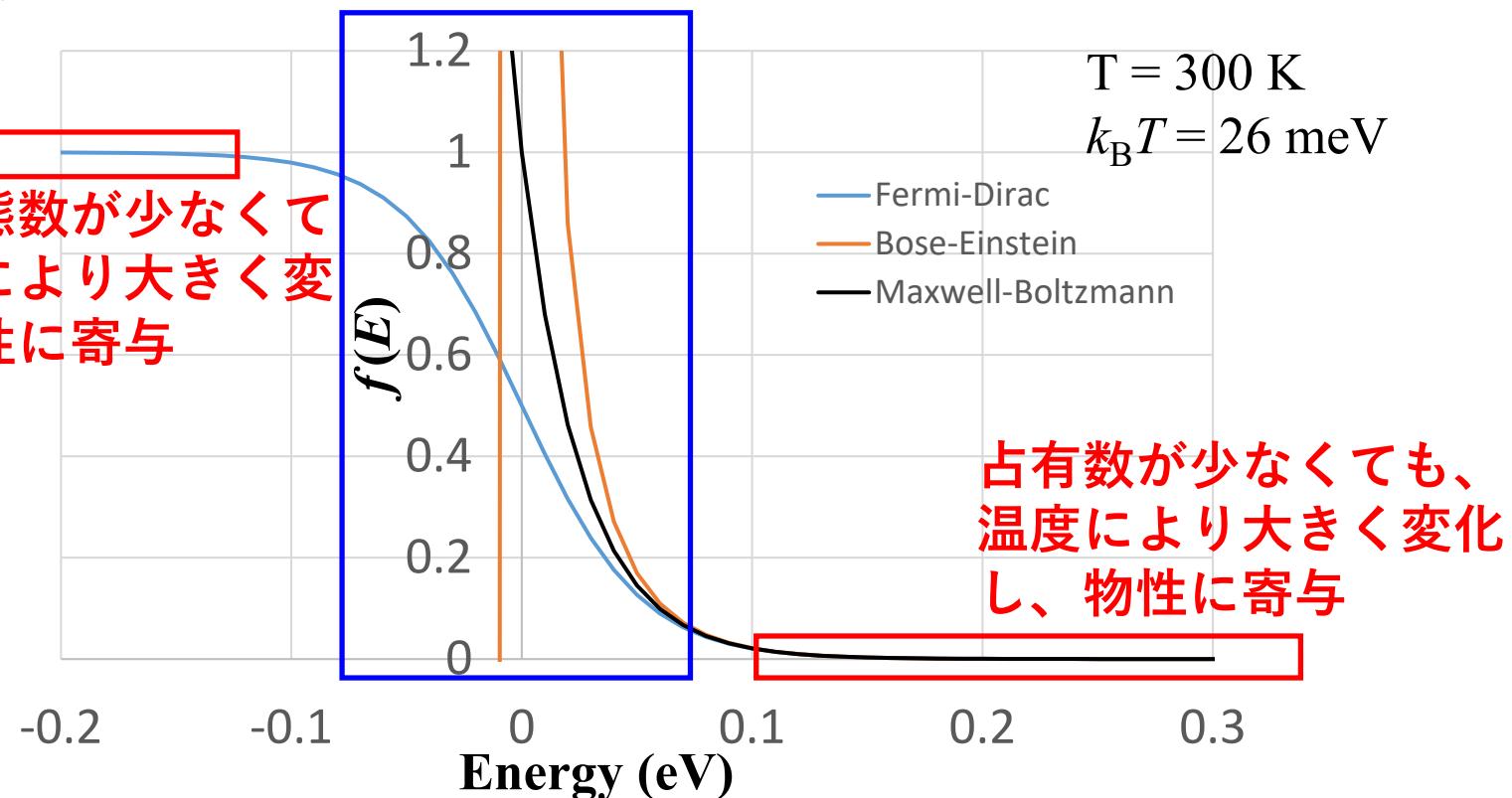
$$\text{BE分布: } f(E) = \frac{1}{\exp[(E - \mu)/k_B T] - 1}$$

$(E - \mu)/k_B T \gg 1$  の場合: Maxwell-Boltzmann 近似に漸近 (古典領域)

$$f(E) = \exp[-(E - \mu)/k_B T]$$

非縮退半導体では  $\mu$  付近 のエネルギー準位はバンドギャップ内  
なので、電子がない  $\Rightarrow$  欠陥が絡む物性以外には効かない

非占有状態数が少なくて  
も、温度により大きく変  
化し、物性に寄与



# 金属・半導体

# 状態密度

物理量  $P$  の統計平均を求める

古典統計力学  $P = \int P(\mathbf{r}, \mathbf{p}) f(E(\mathbf{r}, \mathbf{p})) d\mathbf{r} d\mathbf{p}$

多くの場合 (空間が等方的な場合)、 $E$  に関する一次元積分に直せる:

$$P = \int P(\mathbf{k}) f(\mathbf{k}) g(\mathbf{k}) d\mathbf{k} = \int P(E) f(E) N(E) dE$$

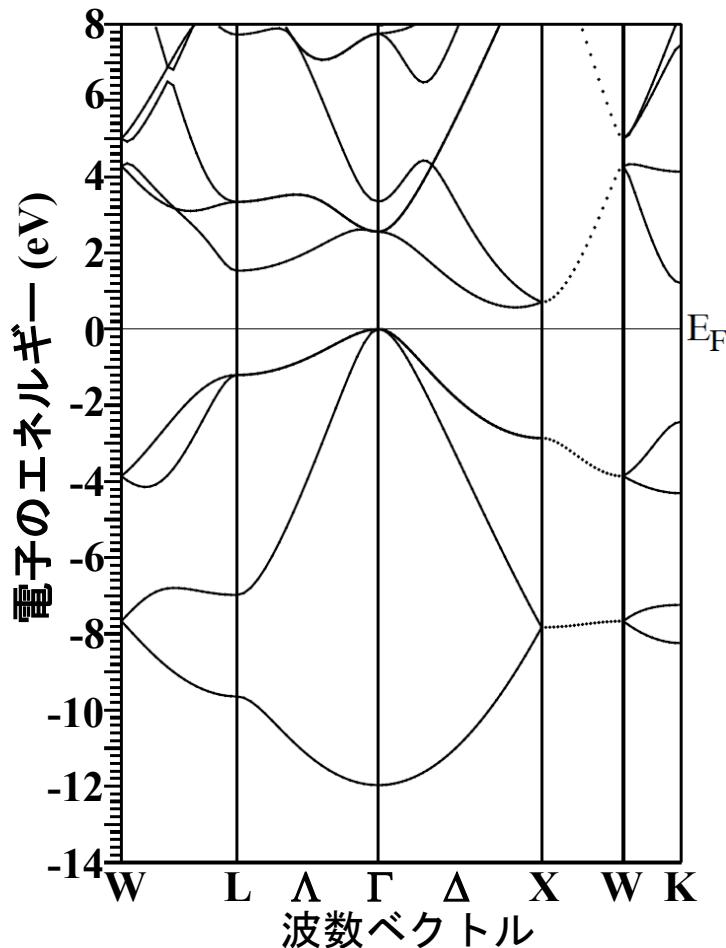
$g(\mathbf{k}) d\mathbf{k} = N(E) dE$  を満たすように状態密度  $N(E)$  を決定する。

量子統計力学  $P = \sum_i P_i f(E_i)$

$E_i$  の分布が密であれば、和は積分で近似できる。

$$P = \sum_i P_i f(E_i) = \int P(E) f(E) N(E) dE$$

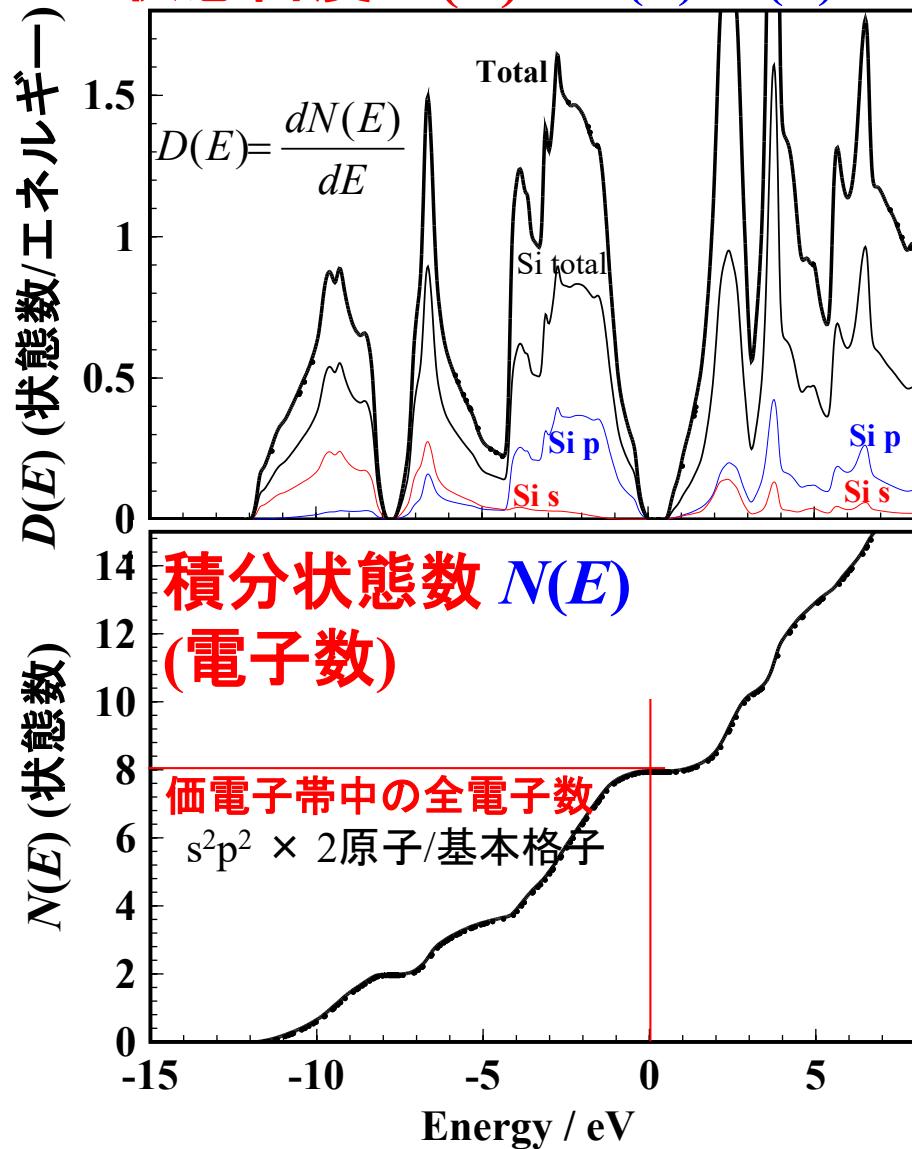
# 状態密度 (Density Of States: DOS)



状態密度  $D(E)$ :  
 $E \sim E + dE$  の範囲の状態数  
 $dN(E) = D(E)dE$

$E$ を $\Delta E$ 毎のメッシュに区切り、  
第一B.Z.内のある  $E \sim E + \Delta E$  内にある準位数を足し合わせることで計算される

状態密度  $D(E)$ :  $dN(E) = D(E)dE$



# 状態密度の計算手順

状態密度  $D(E)$ :  $E \sim E + dE$  の範囲の状態数 =  $D(E)dE$

1. 第一ブリルアンゾーンを均一に分割し、量子方程式を解いて、各  $k$  点  $k_i$  における固有エネルギー  $E_j(k_i)$  を求める
2. 状態密度の配列  $D[i]$  を用意し、すべての要素を 0 で初期化する。状態密度のエネルギーを幅  $h$  で分割する。  
計算するエネルギーの下限を  $E_{\min}$  とすると、 $D[i]$  に対応するエネルギー  $E_i$  は

$$E_i = E_{\min} + h * i$$

3. すべての固有状態について、固有エネルギー  $E_j(k_i)$  から対応する  $i$  を求める。

$$i = \text{int}((E_j(k_i) - E_{\min}) / h + 0.000001)$$

対応する  $D[i]$  に 状態数 1 を加える。

4. 単位は 状態数/単位格子体積 になっているので、 $h$  [eV] で割って 状態数/単位格子体積/eV になおす。
5. 必要に応じて単位を 状態数/cm<sup>3</sup>/eV などになおす。

## § 7.2 自由粒子の状態密度の求め方

変数変換して、計算しやすい形で平均を取る

$$P = \sum_i P_i f(E_i) = \int P(\mathbf{r}, \mathbf{p}) f(E(\mathbf{r}, \mathbf{p})) d\mathbf{r} d\mathbf{p} = \int P(k) f(k) g'(k) dk = \int P(e) f(e) N(e) de$$

$g(\mathbf{k})d\mathbf{k} = g'(|\mathbf{k}|)d|\mathbf{k}| = N(e)de$  を満たすように選ぶ

$g'(|\mathbf{k}|)$  波数に関する状態密度

$N(e)$  (エネルギーに関する) 状態密度

1. 状態数を数えるため、一辺  $L$  の立方体に粒子が閉じ込められている場合を考え、 $L \Rightarrow \infty$  の極限を取る。

1つの量子状態が  $k$  空間中で占める体積       $v_k = \left(\frac{2\pi}{L}\right)^3 = \frac{(2\pi)^3}{V}$

2. 体積  $dk_x dk_y dk_z$  中の状態数  $(2S+1) \frac{dk_x dk_y dk_z}{v_k} = \frac{(2S+1)V}{(2\pi)^3} d\mathbf{k}$       (7.38)

3. 変数変換  $g(\mathbf{k})d\mathbf{k} = \frac{(2S+1)V}{(2\pi)^3} dk_x dk_y dk_z = \frac{(2S+1)V}{(2\pi)^3} 4\pi |\mathbf{k}|^2 d|\mathbf{k}| = g'(|\mathbf{k}|)d|\mathbf{k}|$       (7.38)

4. 変数変換 自由粒子のエネルギー  $e = \frac{\hbar^2 k^2}{2m}$  から、 $\frac{d|\mathbf{k}|}{de} = \left(\frac{\hbar^2}{m} |\mathbf{k}|\right)^{-1}$

$$g(\mathbf{k})d\mathbf{k} = g'(|\mathbf{k}|)d|\mathbf{k}| = \frac{(2S+1)V}{(2\pi)^3} 4\pi |\mathbf{k}|^2 d|\mathbf{k}| = N(e)de$$

$$N(e) = (2S+1)V \frac{2\pi(2m)^{3/2}}{\hbar^3} \sqrt{e} \quad (9.41) \text{ エネルギーに関する状態密度}$$

## § 8.4 有限温度での粒子数、エネルギー

$$N(e) = (2S + 1)V \frac{2\pi(2m)^{3/2}}{h^3} \sqrt{e}$$

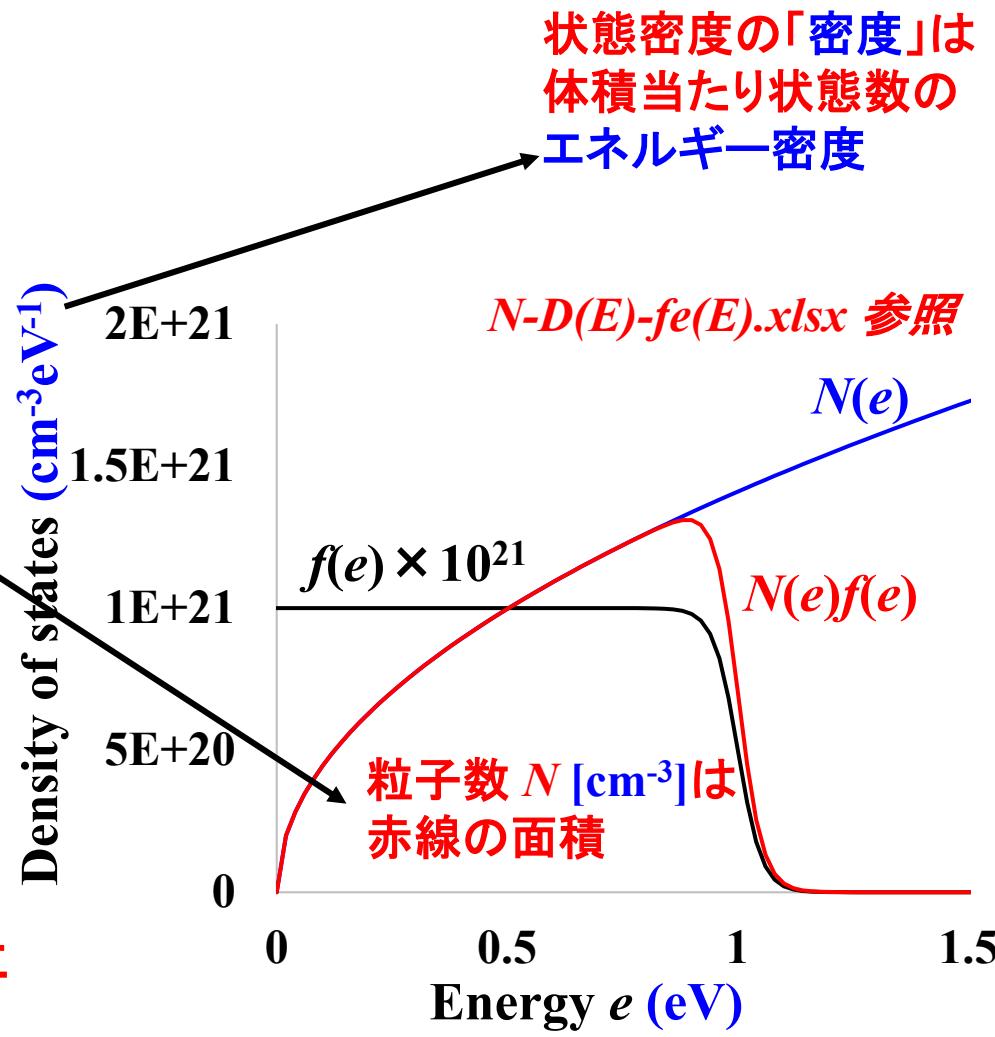
$$N = \int_0^\infty N(e)f(e) de \quad (8.32)$$

$$U = \int_0^\infty e(k)N(e)f(e) de \quad (8.33)$$

$$f(e) = \frac{1}{\exp(\beta(e-E_F))+1} \quad (8.34)$$

$E_F$  の決定

(8.32)式で求めた  $N$  が実際の電子数に等しくなる  $E_F$  をさがす



# 0 Kでの金属の電子分布と $E_F$

絶対零度での  $f(e_i)$

$$f(e_i) = \begin{cases} 0 & (e_i > E_F) \\ 1/2 & (e_i = E_F) \\ 1 & (e_i < E_F) \end{cases}$$

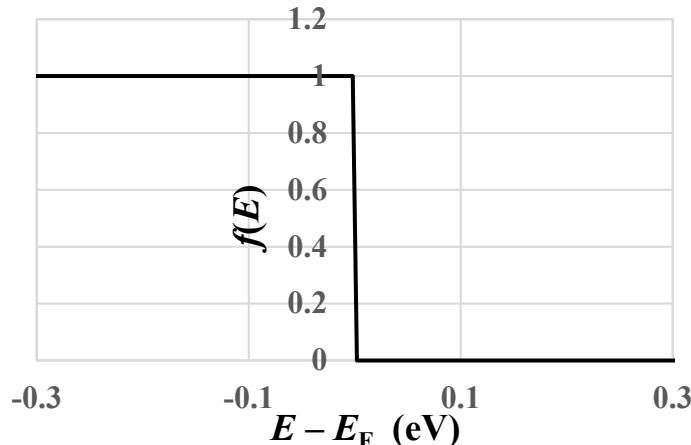
$$N = \int_0^{\infty} N(E) f(E) dE = \int_0^{E_F} N(E) dE$$

$$N(E) = (2S + 1)V \frac{2\pi(2m)^{3/2}}{h^3} \sqrt{E}$$

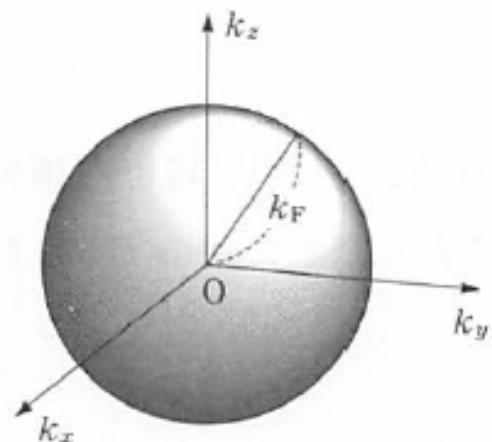
$$E_F = \frac{\hbar^2}{2m} \left( 3\pi^2 N/V \right)^{2/3} : \text{Fermiエネルギー} \quad T_F = E_F/k_B$$

銀の値  $E_F = 5.5 \text{ eV}$        $T_F = 6.4 \times 10^4 \text{ K}$

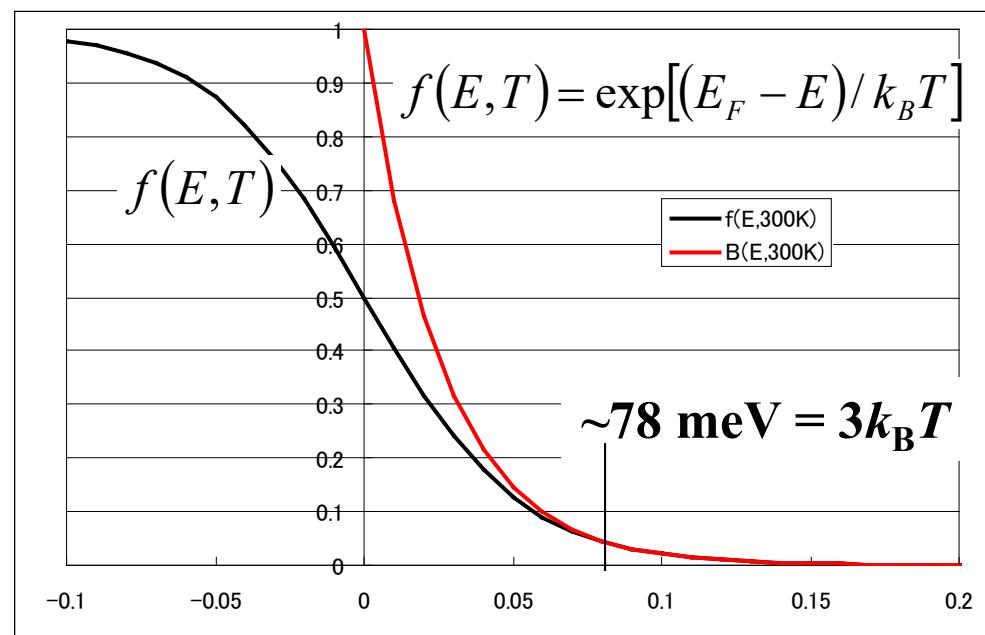
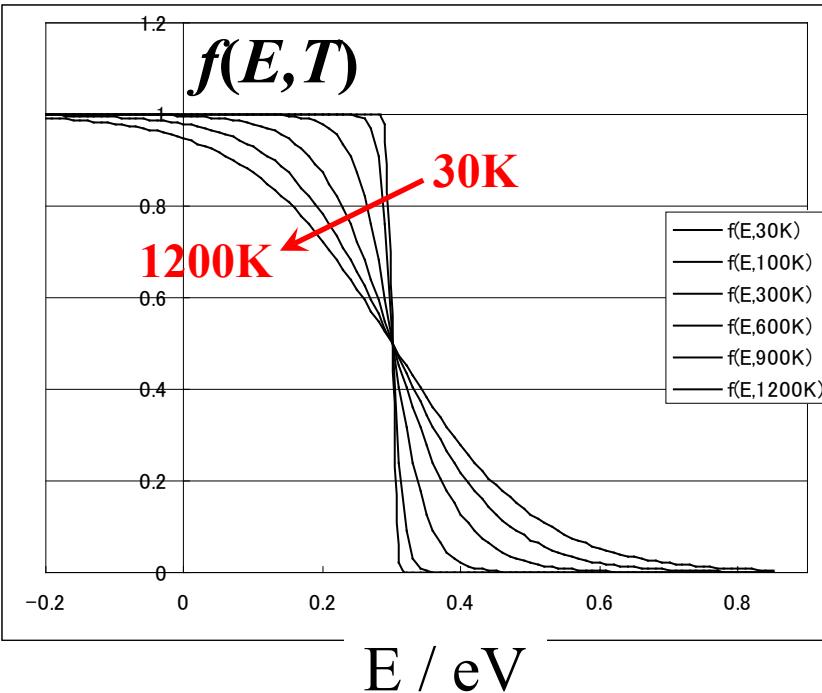
★ 金属中の電子は  
熱エネルギー  $k_B T \sim 26 \text{ meV} @ 300K$  より  
はるかに大きいエネルギーをもつ



8-2図 フェルミ面



# 有限温度のFermi-Dirac分布関数の形



$$f(E, T) \Rightarrow 1$$

$$(E - E_F \ll k_B T)$$

$$f(E, T) = 1/2$$

$$(E = E_F)$$

$$f(E, T) = \exp[(E_F - E)/k_B T] \Rightarrow 0 \quad (E - E_F \gg k_B T)$$

$(E - E_F)/k_B T$  が大きい高温では Boltzmann 分布と同じ振る舞いをする  
「非縮退電子ガス」

↔ 「統計的に縮退した電子ガス」

# 金属の電子密度の計算: 注意とプログラム

問題点:  $N(e)f(e)$  の積分

- 積分範囲が広い  $E = 0 \sim E_F + \alpha k_B T \sim$  数 eV (精度は  $\exp(-\alpha)$  程度)
  - 精度が重要な領域は  $E_F$  近傍の  $\alpha k_B T \sim 0.1$  eV 程度
  - 数値積分では、関数が急激に変化する領域 ( $E_F$  近傍) で  
被積分変数の分割幅  $\Delta E$  を細かく切る必要がある ( $\alpha k_B T$  を 100 分割、1 meV 程度)  
 $\Rightarrow$  全積分領域  $E = 0 \sim E_F + \alpha k_B T$  で同じ  $\Delta E$  を使うのは効率が悪い
- => • 積分区間を分割する ( $0 \sim E_F - \alpha k_B T$  の区間は  $N(e)$  の解析積分を使っても良い)  
• 精度指定・精度保証のあるライブラリを使うのが望ましい  
python の `integrate.quad` 関数で、`epsrel` 変数を指定する。

プログラム: N-integration-metal.py

実行法: python N-integration-metal.py 300 5.0

温度 300K、 $E_F = 5.0$  eV で、異なる領域について、300 回同じ数値積分する時間を計測。

精度 8 桁 (`epsrel = 1e-8`)、 $\alpha = 6$  の場合:

積分範囲                    300回の計算時間

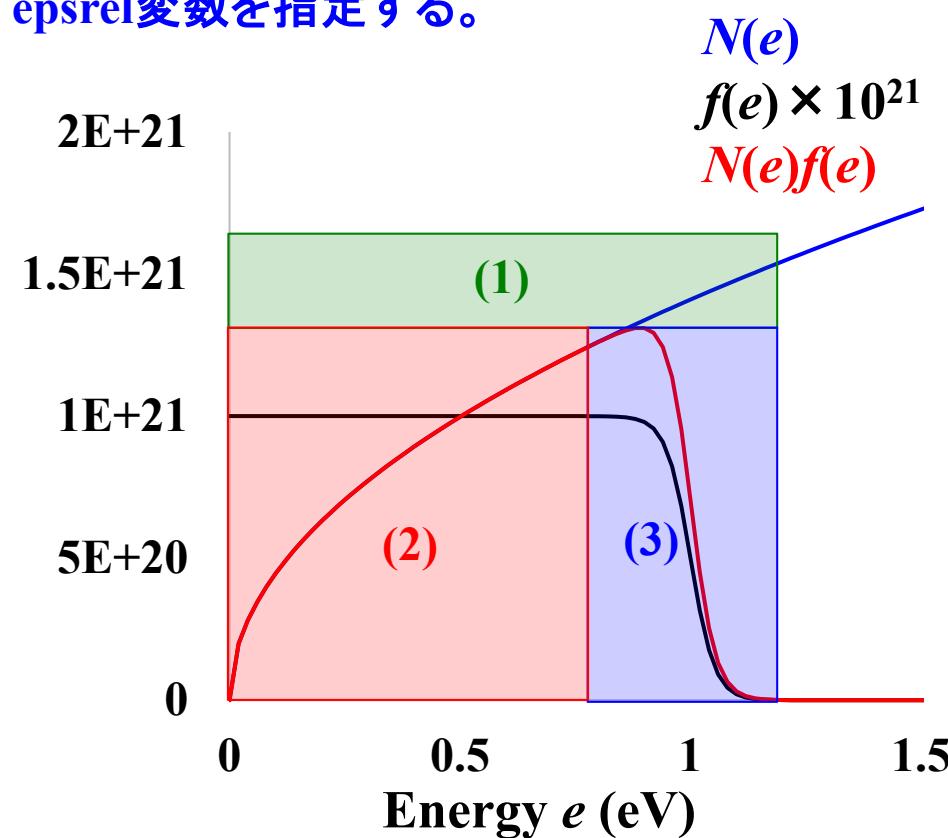
(1)  $0 \sim E_F + \alpha k_B T$                     0.109 秒

(2)  $0 \sim E_F - \alpha k_B T$                     0.063 秒

(3)  $E_F - \alpha k_B T \sim E_F + \alpha k_B T$     0.016 秒

分割して和を取るほうが 30% ほど早い

(2) で解析積分を使えば、10 倍速くなる



# 金属の $E_F$ の計算: プログラム

方針: 有限温度  $T$  における  $N(e)f(e, E_F)$  を  $E = 0 \sim \infty$  (実際には  $E_F + ak_B T$ ) で行い、電子密度  $N$  に等しくなる  $E_F(T)$  を求める。

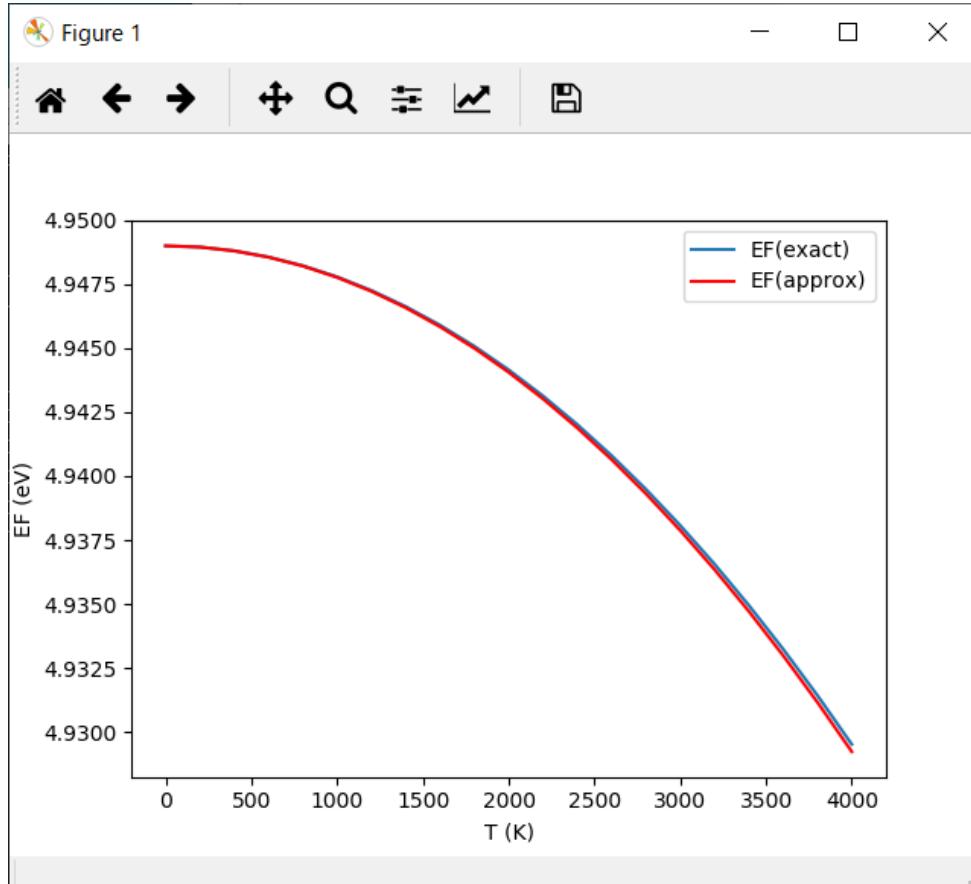
$E_F(T)$  の初期値として 0K の  $E_F(0)$  を用いることで、Newton法でも安定して計算ができる。

近似式  $E_F(T) = E_F(0) - \frac{\pi^2}{6} (k_B T)^2 N'(E_F(0)) / N(E_F(0))$  と比較する。

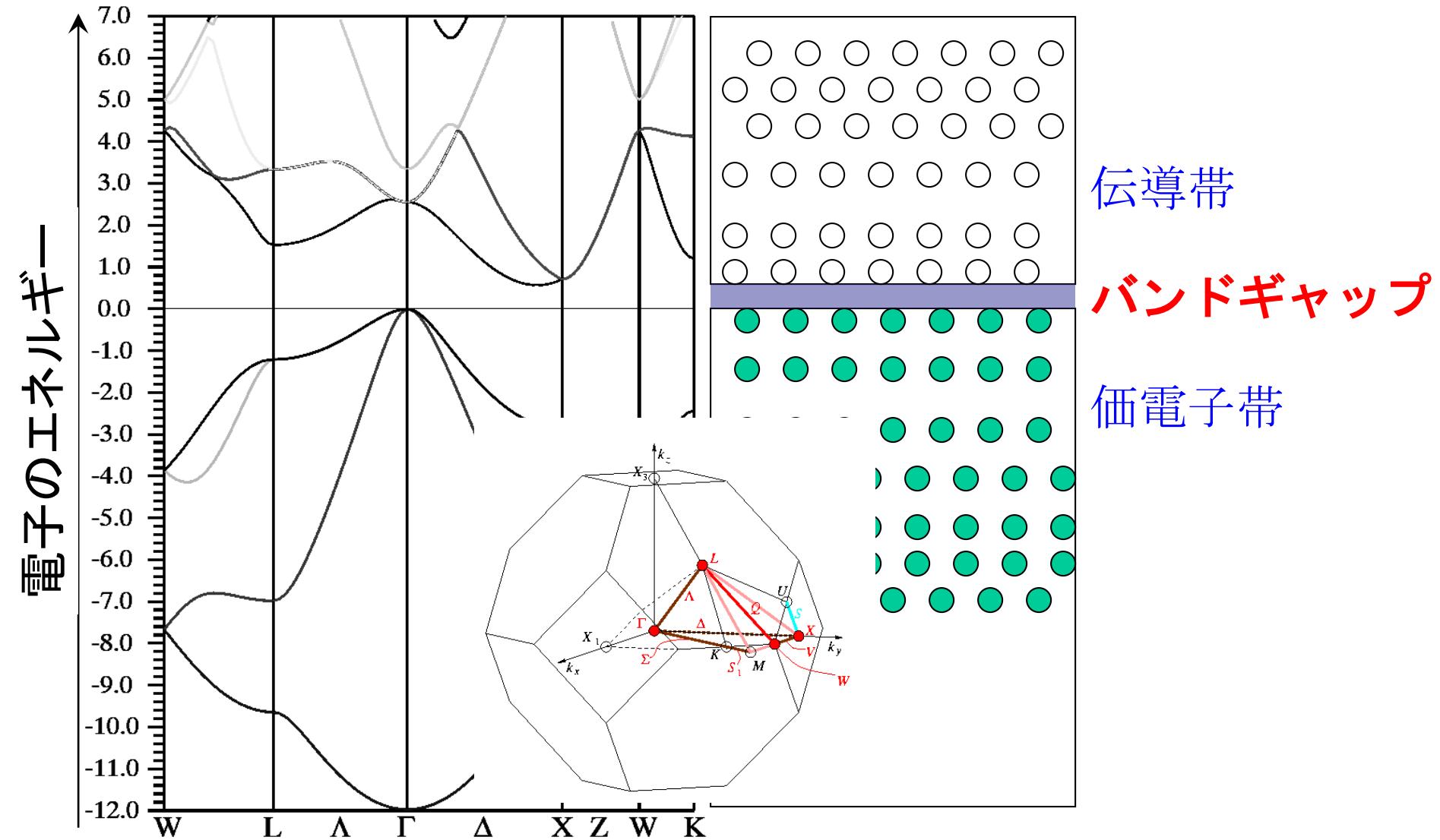
プログラム: ef-t-metal.py

実行法: python ef-t-metal.py

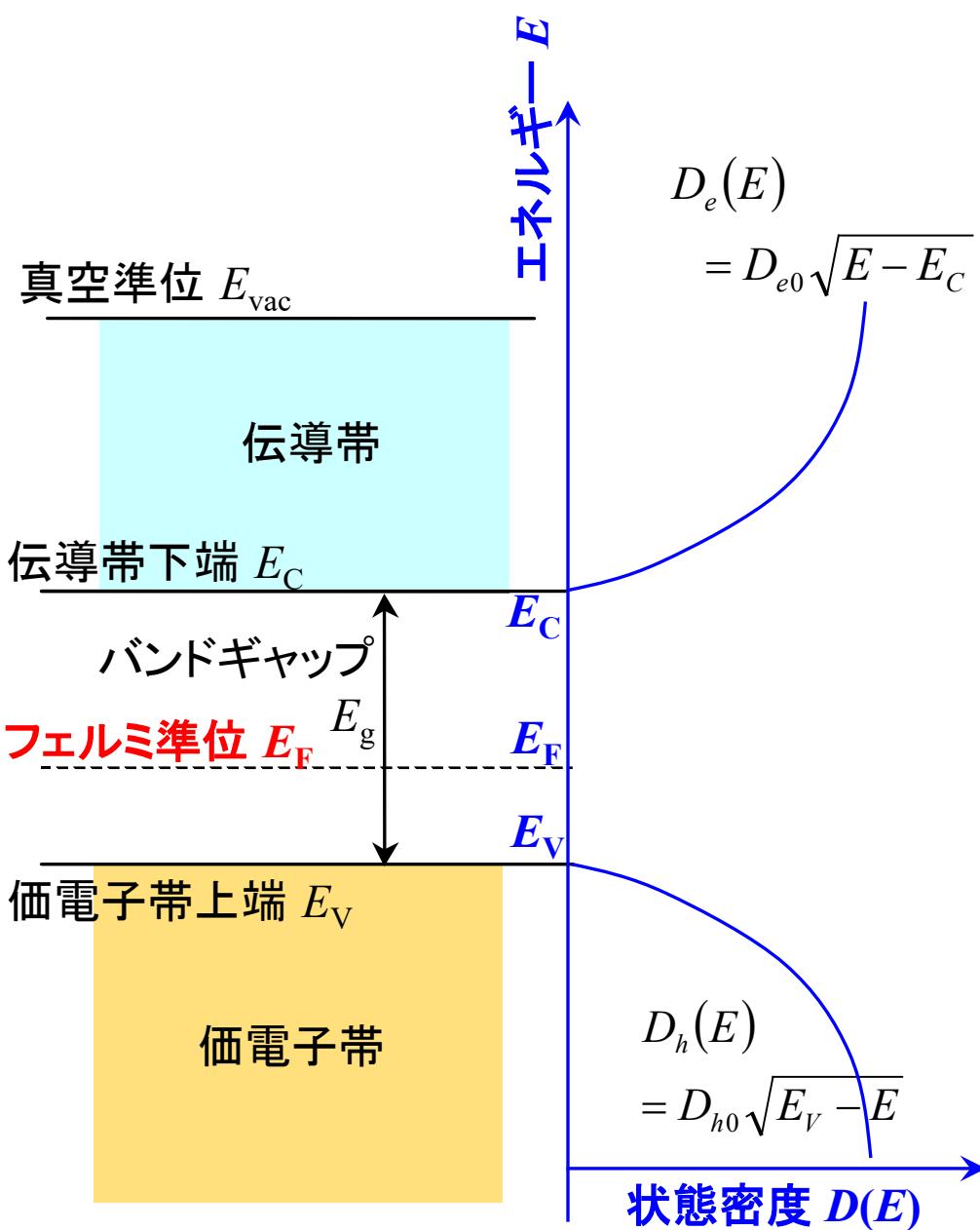
| $T$ (K) | $E_F$ (Newton法, eV) | $E_F$ (近似式, eV) |
|---------|---------------------|-----------------|
| 0       | 4.948988            | 4.948988        |
| 600     | 4.948554            | 4.948544        |
| 1200    | 4.947248            | 4.947211        |
| 1800    | 4.945069            | 4.944990        |
| 2400    | 4.942013            | 4.941880        |
| 3000    | 4.938075            | 4.937882        |
| 3600    | 4.933247            | 4.932994        |
| 4000    | 4.929529            | 4.929243        |



# シリコンの電子構造 (バンド構造)



# 半導体の電子構造



$$E(k) \sim E_0 + \frac{\hbar^2}{2m^*} k^2$$

**$E$  に関する状態密度**

$$\begin{aligned} D(E) &= N(E)/V \\ &= \frac{2\pi(2m^*)^{3/2}}{h^3} \sqrt{E} \end{aligned} \quad (9.41)$$

**Fermi-Dirac分布関数**

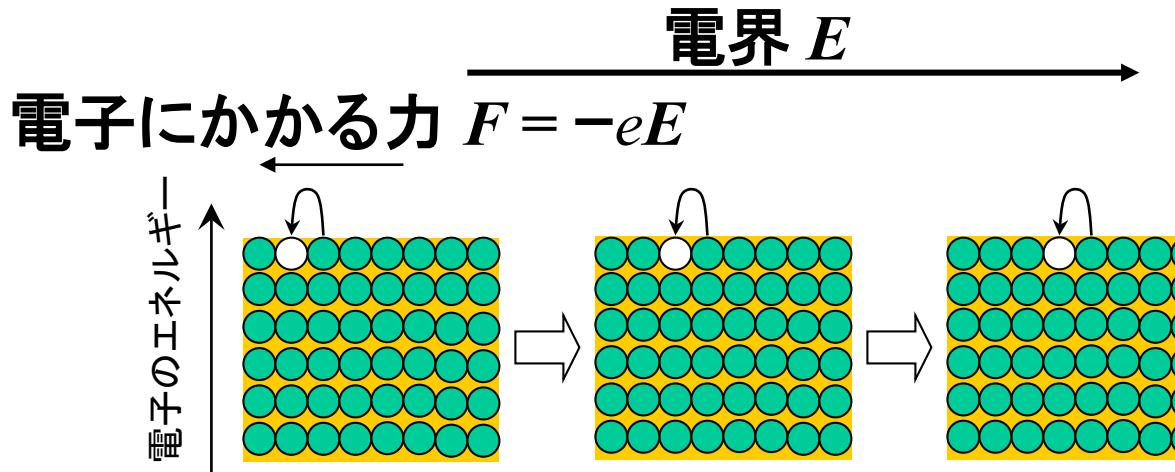
$$f(E) = \frac{1}{\exp(\beta(E-E_F))+1} \quad (8.5)$$

**半導体中:**

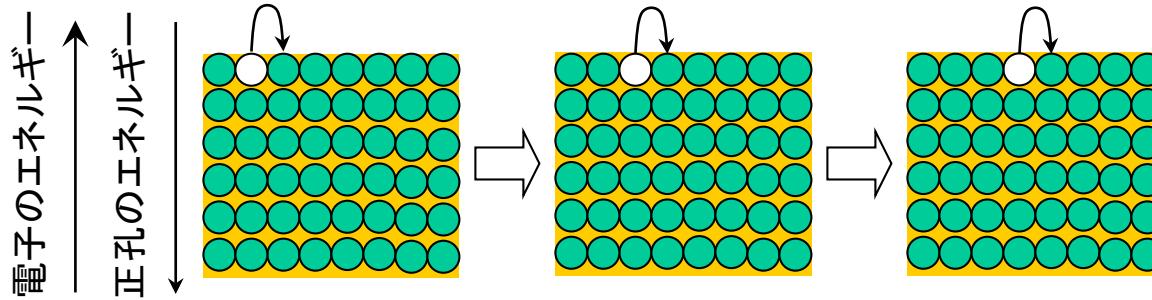
原子核の総電荷  $Z = \sum Z_i$  と  
総電子数  $N_e$  が等しく、**電荷中性条件**を満たす

- ・電子数の条件 (電荷中性条件)  
 $N_e = \int D(E)f(E)dE$
- ・真性半導体では、0 Kでは  
 価電子帯上端  $E_V$  まで  
 電子が詰まっている

# 正孔: 直観的な説明



電子の孔にかかる見かけの力  $F = +eE$



多数の電子の中に少数の”孔”があるとき、孔だけを扱う方がわかりやすい  
=> 力と”孔”的加速の向きを合わせるため、電荷を正にする

# 電子と正孔: 電荷中性条件の書き換え

0 K における全電子数の条件  $N_e = \int_{-\infty}^{\infty} f(E)D(E)dE = \int_{-\infty}^{E_V} D_h(E)dE$

有限温度における全電子数の条件 => 電荷中性条件に置き換える

$$N_e = \int_{-\infty}^{\infty} f(E)D(E)dE$$

$N_e$  は  $N_A$  程度の大きな数なので、扱いにくい

=>  $N'_e = \int_{-\infty}^{\infty} f(E)D(E)dE - N_e = 0$  を基準に考える

$$N'_e = \int_{-\infty}^{E_V} f(E)D_h(E)dE - \int_{-\infty}^{E_V} D_h(E)dE + \int_{E_C}^{\infty} f(E)D_e(E)dE = -n_h + n_e = 0$$

$$n_h = \int_{-\infty}^{E_V} (1 - f(E))D_h(E)dE = \int_{-\infty}^{E_V} f_h(E)D_h(E)dE$$

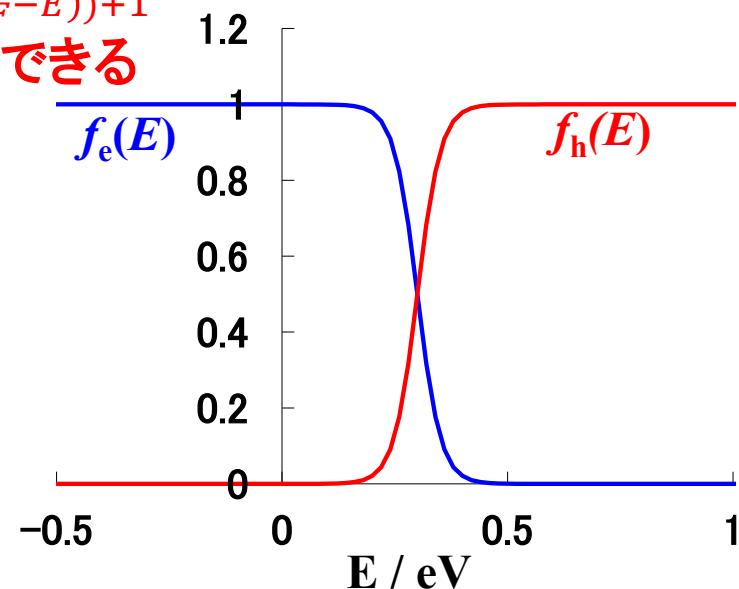
$$f_h(E) = 1 - f(E) = \frac{\exp(\beta(E-E_F))}{\exp(\beta(E-E_F))+1} = \frac{1}{\exp(\beta(E_F-E))+1}$$

\* 正孔は電子が空いた“孔”とみなすことができる

$$n_e = \int_{E_C}^{\infty} f_e(E)D_e(E)dE$$

$$f_e(E) = \frac{1}{\exp(\beta(E-E_F))+1}$$

$$N'_e = -n_h + n_e = 0 \Rightarrow n_h = n_e: \text{電荷中性条件}$$



# 自由電子密度

$$n_e = \int_{E_C}^{\infty} f_e(E) D_e(E) dE$$

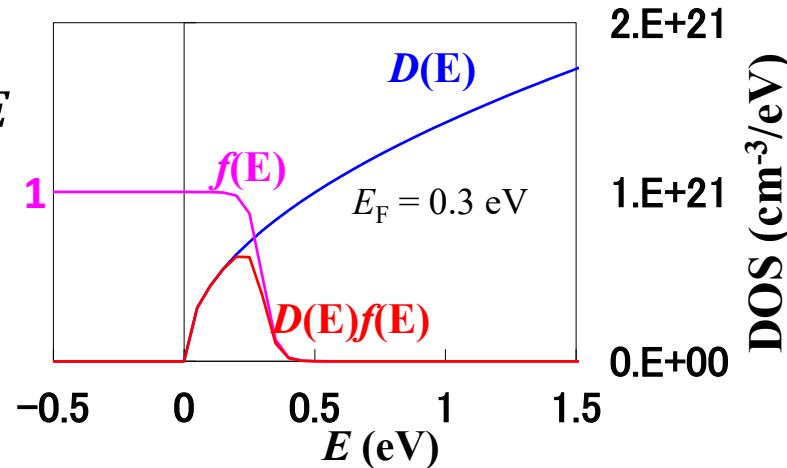
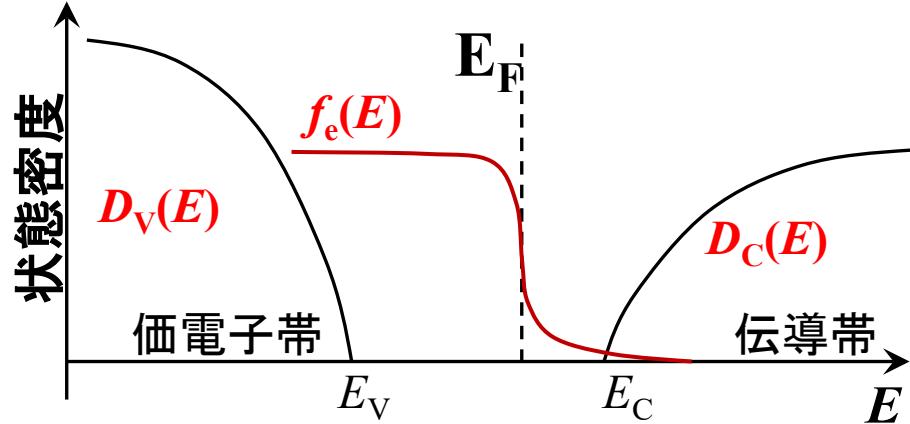
$$f_e(E) = \frac{1}{\exp(\beta(E-E_F))+1}$$

$$D_e(E) = D_{C0} \sqrt{E - E_C} \quad (9.41)$$

$$D_{C0} = \frac{\sqrt{2}}{\pi^2} \frac{m_e^{*3/2}}{\hbar^3}$$

非縮退半導体  $\beta(E - E_F) \gg 1$  では

$$\begin{aligned} n_e &\sim \int_{E_C}^{\infty} \frac{\sqrt{2}}{\pi^2} \frac{m_e^{*3/2}}{\hbar^3} \sqrt{E - E_C} \exp(-\beta(E - E_F)) dE \\ &= \frac{\sqrt{2}}{\pi^2} \frac{m_e^{*3/2}}{\hbar^3} e^{-\beta(E_C - E_F)} \int_0^{\infty} \sqrt{e} \exp(-\beta e) de \end{aligned}$$



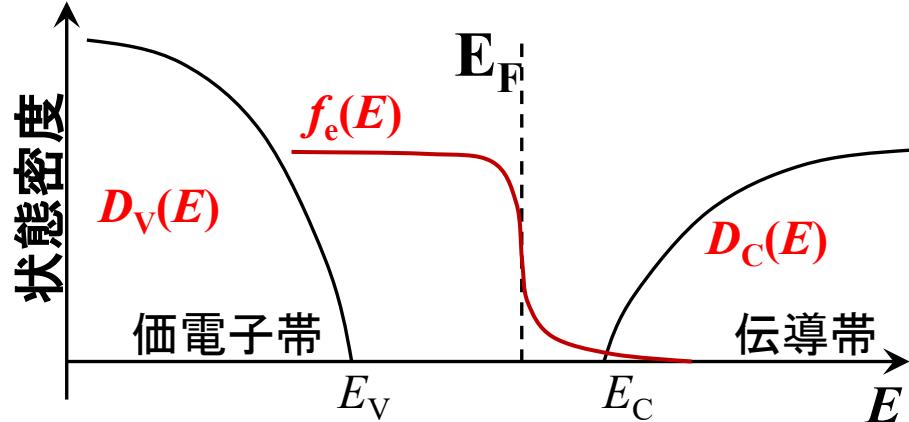
# 自由電子密度、自由正孔密度

$$n_e = \int_{E_C}^{\infty} f_e(E) D_e(E) dE$$

$$f_e(E) = \frac{1}{\exp(\beta(E - E_F)) + 1}$$

$$D_e(E) = D_{C0} \sqrt{E - E_C} \quad (9.41)$$

$$D_{C0} = \frac{\sqrt{2}}{\pi^2} \frac{m_e^{*3/2}}{\hbar^3}$$



非縮退半導体  $\beta(E - E_F) \gg 1$  では

$$\begin{aligned} n_e &\sim \int_{E_C}^{\infty} \frac{\sqrt{2}}{\pi^2} \frac{m_e^{*3/2}}{\hbar^3} \sqrt{E - E_C} \exp(-\beta(E - E_F)) dE \\ &= \frac{\sqrt{2}}{\pi^2} \frac{m_e^{*3/2}}{\hbar^3} e^{-\beta(E_C - E_F)} \int_0^{\infty} \sqrt{e} \exp(-\beta e) de \end{aligned}$$

$$n_e = N_C \exp(-\beta(E_C - E_F))$$

$$N_C = 2 \left( \frac{2\pi m_e^* k_B T}{h^2} \right)^{3/2}$$

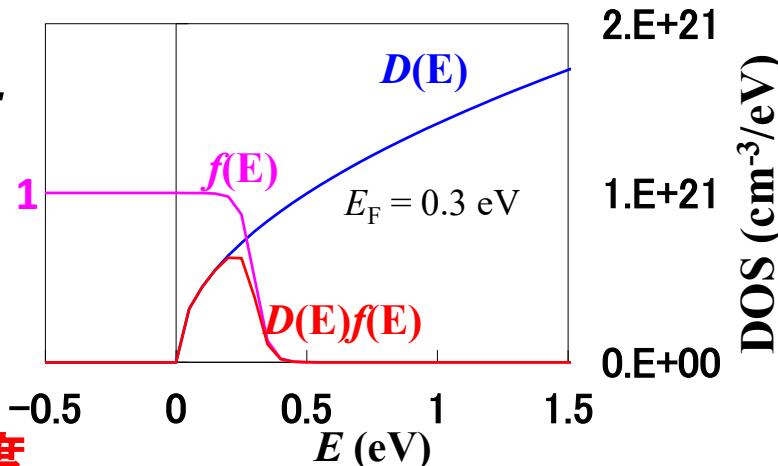
伝導帶有効状態密度

同様に

$$n_h = N_V \exp(-\beta(E_F - E_V))$$

$$N_V = 2 \left( \frac{2\pi m_h^* k_B T}{h^2} \right)^{3/2}$$

価電子帶有効状態密度



# 自由電子密度: 積分式の導出

$$n_e \sim \frac{\sqrt{2}}{\pi^2} \frac{m_e^{*2/3}}{\hbar^3} e^{-\beta(E_C - E_F)} \int_0^\infty \sqrt{e} \exp(-\beta e) de$$

$$\sqrt{e} = x, e = x^2, de = 2x dx$$

$$\int_0^\infty \sqrt{e} \exp(-\beta e) de = \int_0^\infty 2x^2 \exp(-\beta x^2) dx$$

$$\int_0^\infty x^2 \exp(-x^2) dx = \frac{1}{4} \sqrt{\pi}$$

$$n_e \sim \frac{\sqrt{2}}{\pi^2} \frac{m_e^{*3/2}}{\hbar^3} e^{-\beta(E_C - E_F)} \int_0^\infty 2x^2 \exp(-\beta x^2) dx = \frac{1}{2\pi^{3/2}} \frac{1}{\beta^{3/2}} \frac{m_e^{*3/2}}{\hbar^3} e^{-\beta(E_C - E_F)}$$

$$n_e = N_C \exp(-\beta(E_C - E_F))$$

$$N_C = 2 \left( \frac{2\pi m_e^* k_B T}{h^2} \right)^{3/2} \quad \text{伝導帶有効状態密度}$$

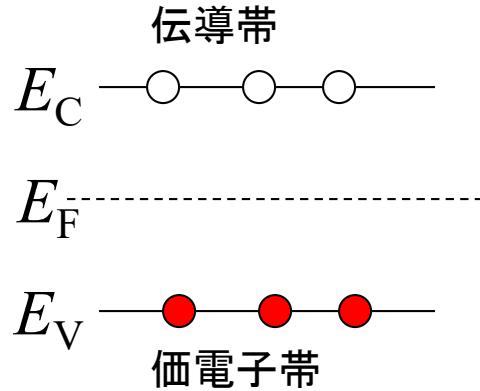
同様に

$$n_h = N_V \exp(-\beta(E_F - E_V))$$

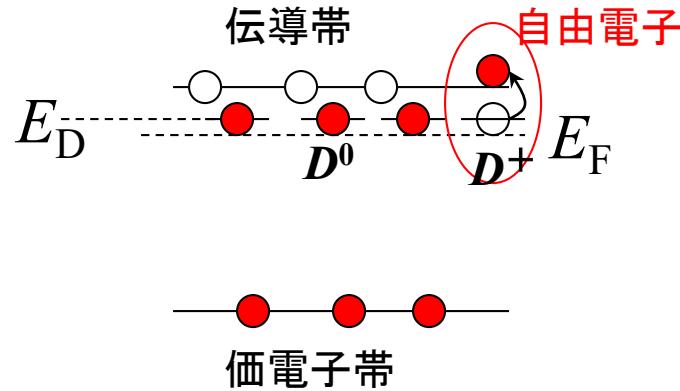
$$N_V = 2 \left( \frac{2\pi m_h^* k_B T}{h^2} \right)^{3/2} \quad \text{価電子帶有効状態密度}$$

# 不純物(ドープ)半導体

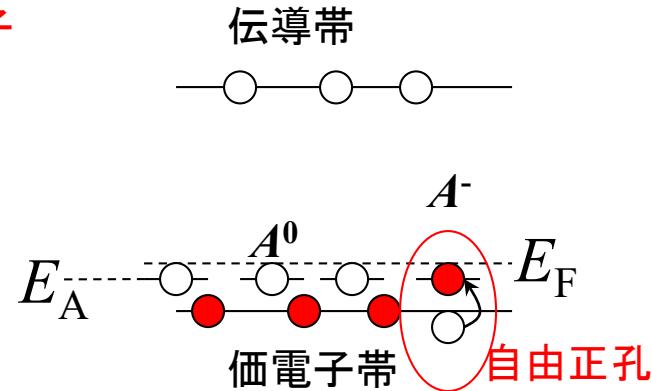
## 真性半導体



## n型半導体



## p型半導体

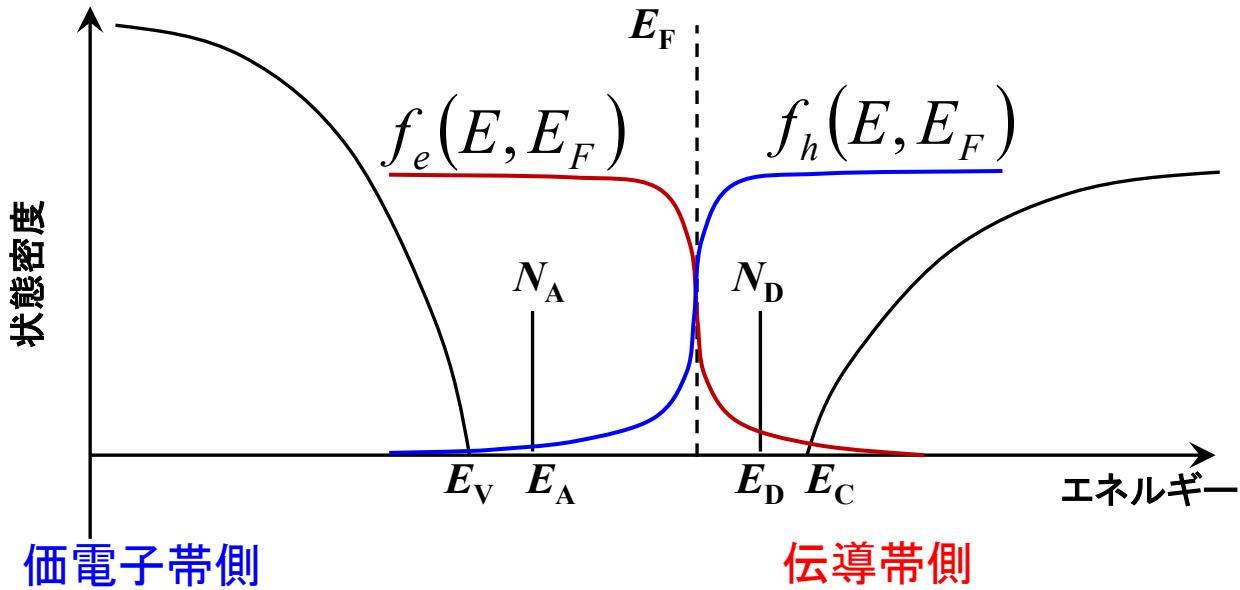


ドナー (donor): 電子を与える (donate) ことができる電子状態  
はき出せる電子をもっている状態が電気的中性 :  $D^0$   
一部のドナーは電子をはき出してイオン化している:  $D^+$   
ドナー準位  $E_D$  ドナー密度  $N_D$

アクセプター (acceptor): 電子を受け取る (accept) ができる電子状態  
電子を受け取れる状態が電気的中性 :  $A^0$   
一部のアクセプターは電子を受け取ってイオン化している:  $A^-$   
アクセプター準位  $E_A$  アクセプター密度  $N_A$

# 半導体の状態密度、電子、正孔

全状態密度:  $D(E) = D_e(E) + D_h(E) + D_D(E) + D_A(E)$



価電子帯側

$$D_h(E) = D_{V0} \sqrt{E_V - E}$$

$$D_A(E) = N_A \delta(E - E_A)$$

$$f_h(E, E_F) = \frac{1}{\exp(\beta(E_F - E)) + 1}$$

自由正孔密度

$$n_h = \int_{-\infty}^{E_V} f_h(E, E_F) D_h(E) dE$$

非縮退半導体密度

$$n_h \sim N_V \exp(-\beta(E_F - E_V))$$

イオン化アクセプター密度

$$N_A^- = N_D (1 - f_h(E_A, E_F))$$

伝導帯側

$$D_e(E) = D_{C0} \sqrt{E - E_C}$$

$$D_D(E) = N_D \delta(E - E_D)$$

$$f_e(E, E_F) = \frac{1}{\exp(\beta(E_F - E)) + 1}$$

自由電子密度

$$n_e = \int_{E_C}^{\infty} f_e(E) D_e(E) dE$$

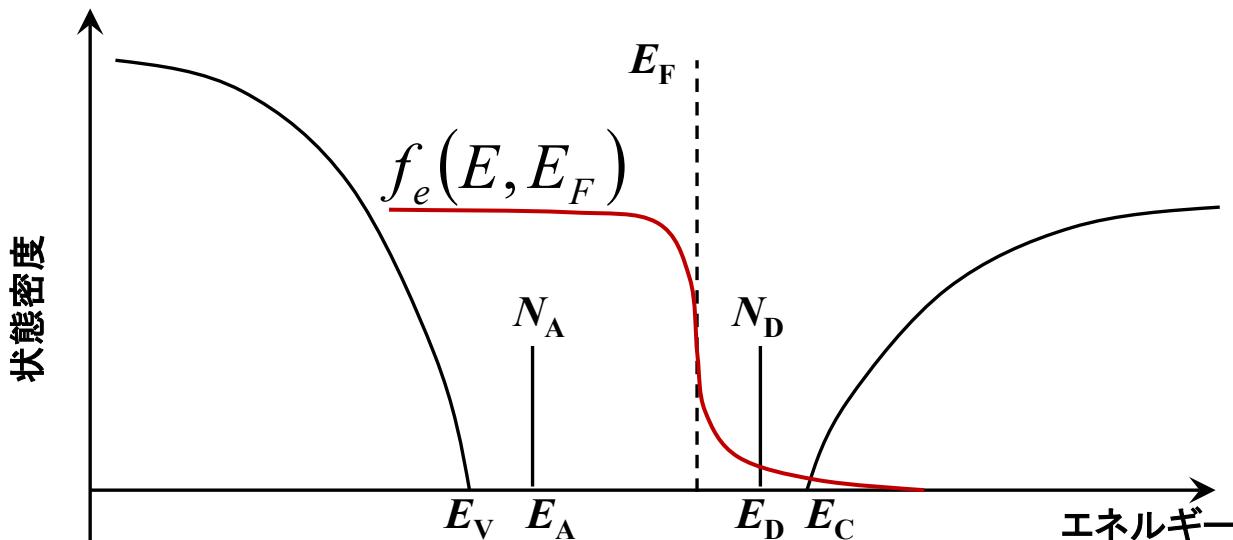
非縮退半導体密度

$$n_e \sim N_C \exp(-\beta(E_C - E_F))$$

イオン化ドナー密度

$$N_D^+ = N_D (1 - f_e(E_D, E_F))$$

# ドナー準位、アクセプター準位の状態



中性ドナー密度  $N_D^0 = N_D - N_D^+$

$$N_D^0 = N_D \frac{1}{\exp(\beta(E_D - E_F)) + 1} \quad \sim N_D \exp(-\beta(E_D - E_F)) \quad (\beta(E_D - E_F) \gg 1)$$

$$N_D^+ = N_D \left(1 - \frac{1}{\exp(\beta(E_D - E_F)) + 1}\right) \sim N_D (1 - \exp(-\beta(E_D - E_F))) \quad (\beta(E_D - E_F) \gg 1)$$

$$\sim N_D \exp(-\beta(E_F - E_D)) \quad (\beta(E_F - E_D) \gg 1)$$

イオン化アクセプター密度  $N_A^-$

$$N_A^- = N_A \frac{1}{\exp(\beta(E_A - E_F)) + 1} \quad \sim N_A \exp(-\beta(E_A - E_F)) \quad (\beta(E_A - E_F) \gg 1)$$

$$N_A^0 = N_A \left(1 - \frac{1}{\exp(\beta(E_A - E_F)) + 1}\right) \sim N_A (1 - \exp(-\beta(E_A - E_F))) \quad (\beta(E_A - E_F) \gg 1)$$

$$\sim N_A \exp(-\beta(E_F - E_A)) \quad (\beta(E_F - E_A) \gg 1)$$

中性アクセプター密度  $N_A^0 = N_A - N_A^-$

$$\sim N_A \exp(-\beta(E_A - E_F)) \quad (\beta(E_A - E_F) \gg 1)$$

$$\sim N_A (1 - \exp(-\beta(E_A - E_F))) \quad (\beta(E_A - E_F) \gg 1)$$

$$\sim N_A \exp(-\beta(E_F - E_A)) \quad (\beta(E_F - E_A) \gg 1)$$

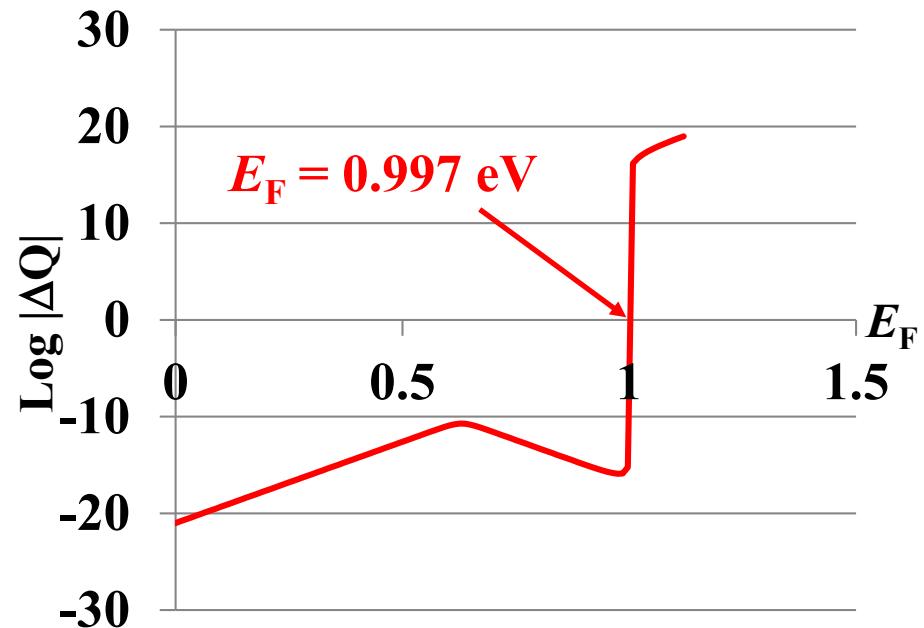
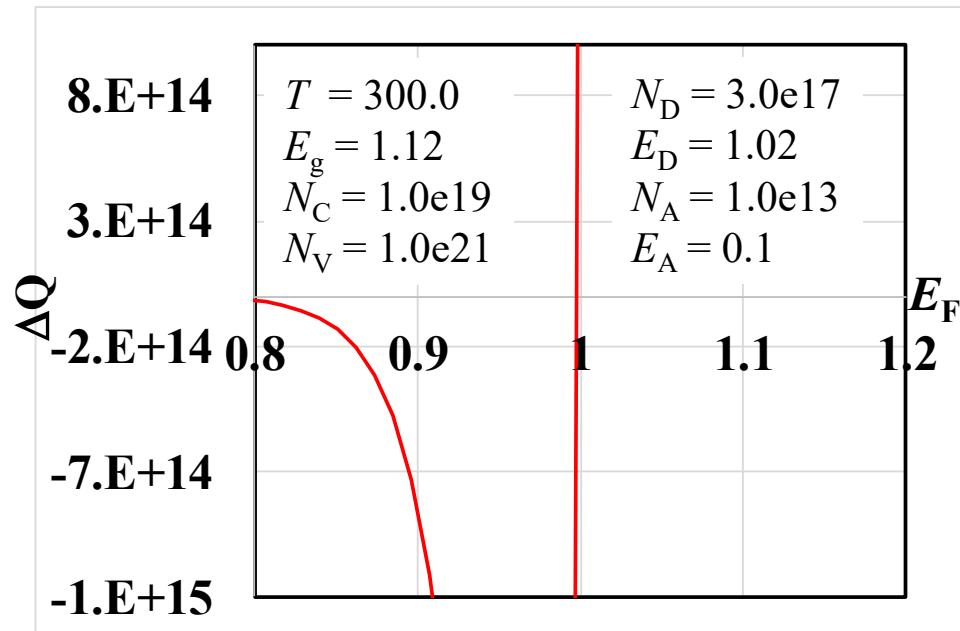
# Fermi準位の求め方: 図解

$$n_e = \int_{E_C}^{\infty} D_e(E) f_e(E, E_F) dE \quad n_h = \int_{-\infty}^{E_V} D_h(E) f_h(E, E_F) dE$$

$$N_D^+ = N_D [1 - f_e(E_D, E_F)] \quad N_A^- = N_A [1 - f_h(E_A, E_F)]$$

$$f_h(E, E_F) = 1 - f_e(E, E_F)$$

$\Delta Q = (n_e + N_A^-) - (n_h + N_D^+)$  を  $E_F$  に対してプロットし、ゼロ点を求める



# Newton-Raphson法

$f(x) = 0$ の解を求める

$$f(x_0 + dx) = f(x_0) + dx f'(x_0) \sim 0$$
$$\Rightarrow x_1 = x_0 + dx = x_0 - f(x_0) / f'(x_0)$$

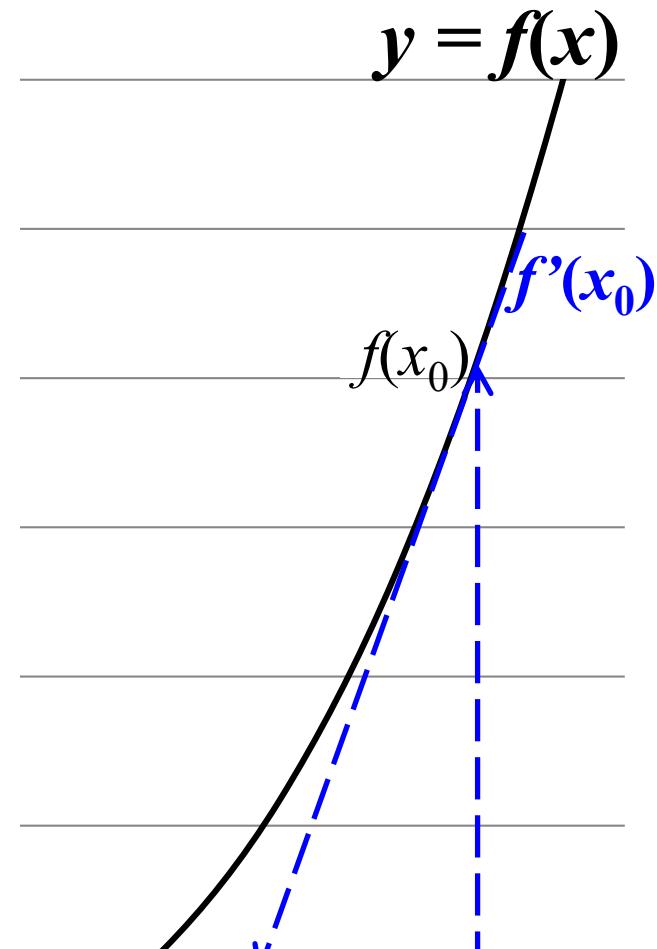
計算では  $f'(x_0)$  を差分計算で置き換えられる  
割線法(セカント法、はさみうち法):

$f'(x) = (f(x_n) - f(x_{n-1})) / (x_n - x_{n-1})$   
を使う。 $f(x)$  の計算回数が少なくなる

発散を抑える工夫で様々な派生がある

$$x_{k+1} = x_k - f(x_k) / (f'(x_k) + \lambda)$$

$\lambda$ : Dumping Factor

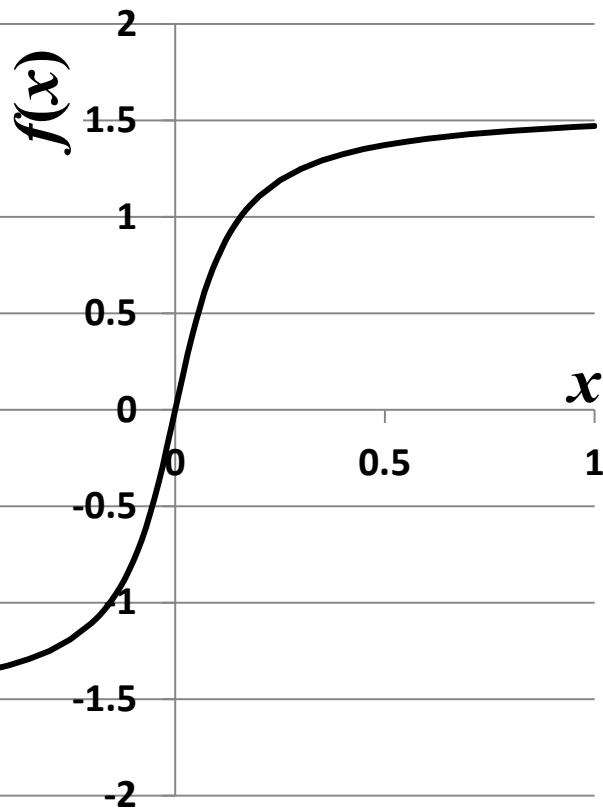


$$x_1 = x_0 - f(x_0) / f'(x_0)$$

# Newton法が難しい例

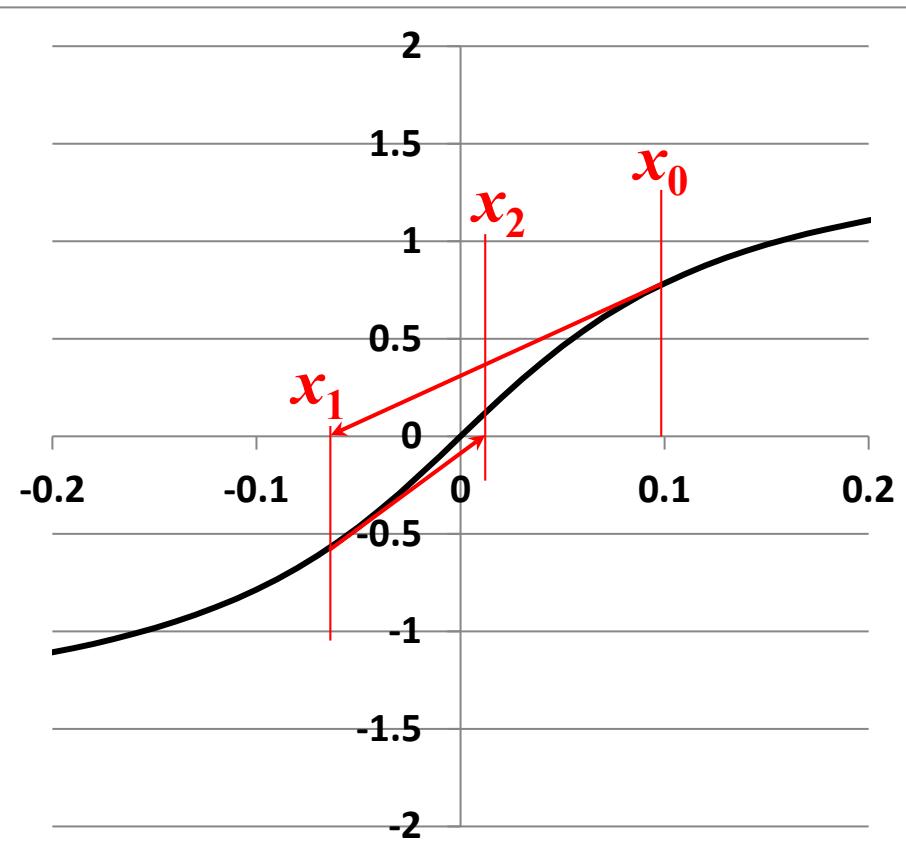
$$f(x) = \tan^{-1}(10x)$$

初期値  $x = 0.1$



収束する場合

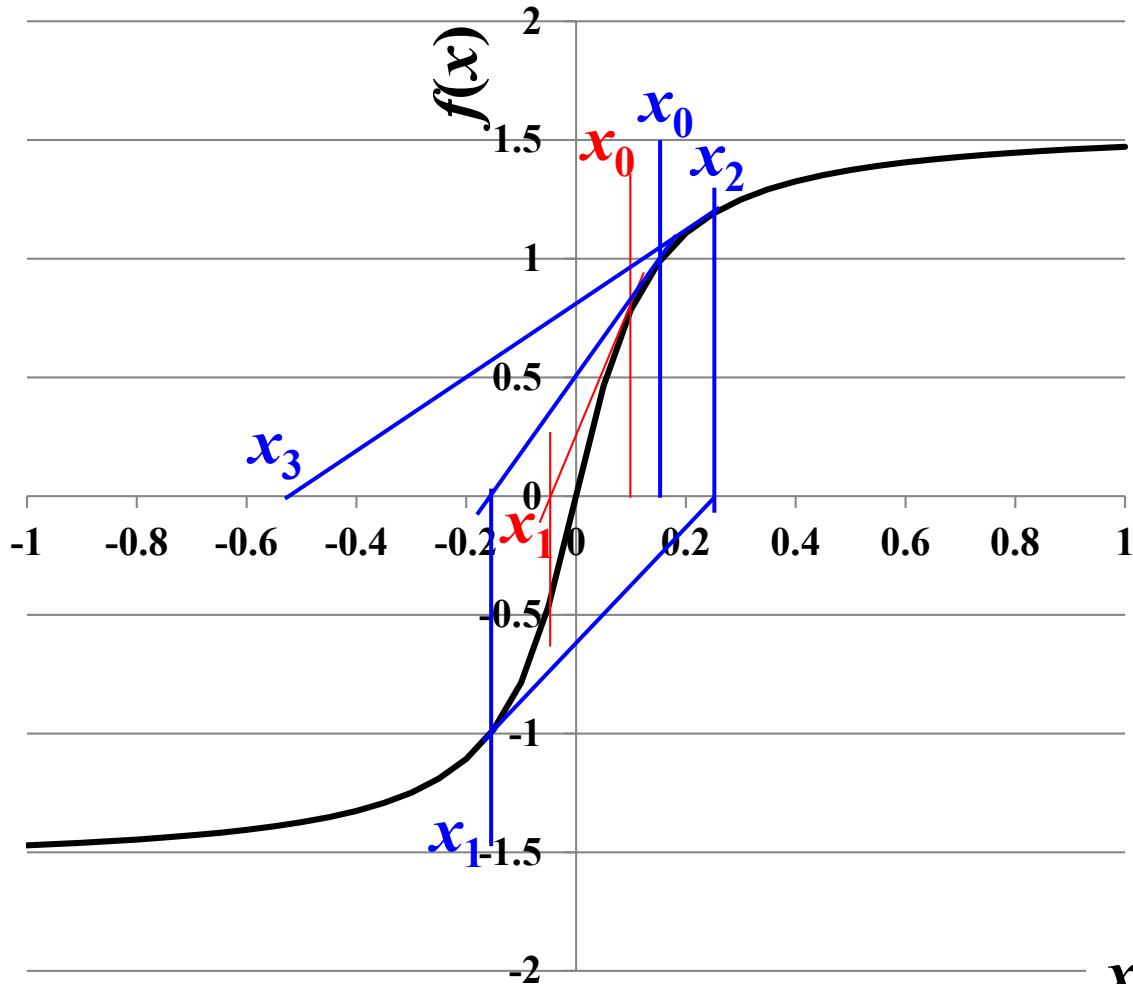
| i | x        | f(x)    | df/dx   | dx       |
|---|----------|---------|---------|----------|
| 0 | 0.1      | 0.7854  | 5       | -0.1571  |
| 1 | -0.05708 | -0.5187 | 7.54257 | 0.06877  |
| 2 | 0.011686 | 0.11633 | 9.86527 | -0.01118 |
| 3 | -0.00011 | -0.0011 | 9.99999 | 0.00011  |
| 4 | 1.15E-10 | 1.2E-09 | 10      | -1E-10   |



# Newton法が難しい例

$$f(x) = \tan^{-1}(10x)$$

初期値  $x = 0.15$



発散する場合 ( $\lambda = 0$ )

| i | x        | $f(x)$  | $df/dx$ | $dx$    |
|---|----------|---------|---------|---------|
| 0 | 0.15     | 0.98279 | 3.07692 | -0.3194 |
| 1 | -0.16941 | -1.0375 | 2.58404 | 0.40152 |
| 2 | 0.232112 | 1.164   | 1.56553 | -0.7435 |
| 3 | -0.51141 | -1.3777 | 0.36827 | 3.74095 |
| 4 | 3.229546 | 1.53984 | 0.00958 | -160.76 |
| 5 | -157.529 | -1.5702 | 4E-06   | 389644  |
| 6 | 389486.7 | 1.5708  | 1.1E-12 | -1E+12  |

ダンピングファクターで  
収束を安定化 ( $\lambda = 1$ )

| i | x        | $f(x)$  | $df/dx$ | $dx$    |
|---|----------|---------|---------|---------|
| 0 | 0.15     | 0.98279 | 3.07692 | -0.2411 |
| 1 | -0.09106 | -0.7387 | 5.46675 | 0.11422 |
| 2 | 0.023161 | 0.2276  | 9.49088 | -0.0217 |
| 3 | 0.001466 | 0.01466 | 9.99785 | -0.0013 |
| 4 | 0.000133 | 0.00133 | 9.99998 | -0.0001 |
| 5 | 1.21E-05 | 0.00012 | 10      | -1E-05  |
| 6 | 1.1E-06  | 1.1E-05 | 10      | -1E-06  |
| 7 | 1E-07    | 1E-06   | 10      | -9E-08  |
| 8 | 9.09E-09 | 9.1E-08 | 10      | -8E-09  |
| 9 | 8.27E-10 | 8.3E-09 | 10      | -8E-10  |

$$x_{k+1} = x_k - f(x_k) / (f'(x_k) + \lambda)$$

$\lambda$ : Damping Factor

# Fermi準位の計算: プログラム

$\Delta Q(E_F) = (n_e + N_{A^-}) - (n_h + N_{D^+}) = 0$  を満たす  $E_F$  を求める。

Newton法は発散しやすい => 二分法を使う

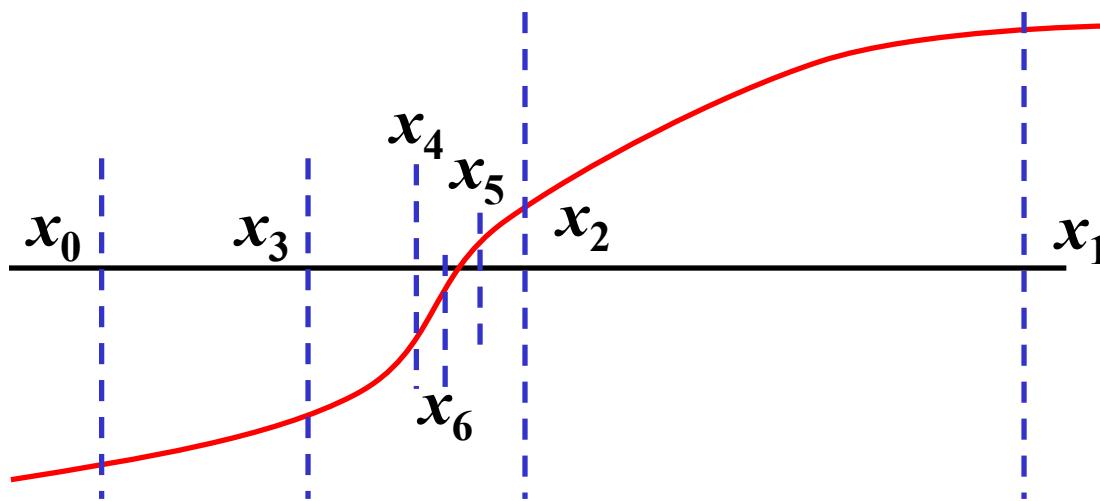
数値積分の講義資料: <http://conf.msl.titech.ac.jp/Lecture/python/index-numericalanalysis.html>

原理:  $f(x)$  が単調関数であれば、解  $x$  は  $f(x_0) < 0$  かつ  $f(x_1) > 0$

(あるいは  $f(x_0) > 0$  かつ  $f(x_1) < 0$ ) を満たす区間  $[x_0, x_1]$  に1つ存在する。

手順:  $f(x_0) < 0$  かつ  $f(x_1) > 0$  の場合を考える ( $f(x_0) \cdot f(x_1) < 0$  で判断)。

1.  $x_2 = (x_0 + x_1) / 2.0$
2.  $f(x_2) > 0$  ( $f(x_0) \cdot f(x_2) < 0$ ) であれば、 $x_1$  を  $x_2$  で置き換える  
 $f(x_2) < 0$  ( $f(x_1) \cdot f(x_2) < 0$ ) であれば、 $x_0$  を  $x_2$  で置き換える
3.  $|x_1 - x_0|, |f(x_1) - f(x_0)|$  が必要な精度以下になったら、  
解を  $x_2$  にして反復終了
4. 1. に戻って反復



# Fermi準位の計算: プログラム

プログラム: EF-T-semiconductor.py

使用法: python EF-T-semiconductor.py EA NA ED ND Ec Nv Nc

使用例: python EF-T-semiconductor.py 0.05 1.0e15 0.95 1.0e16 1.0 1.2e19 2.1e18

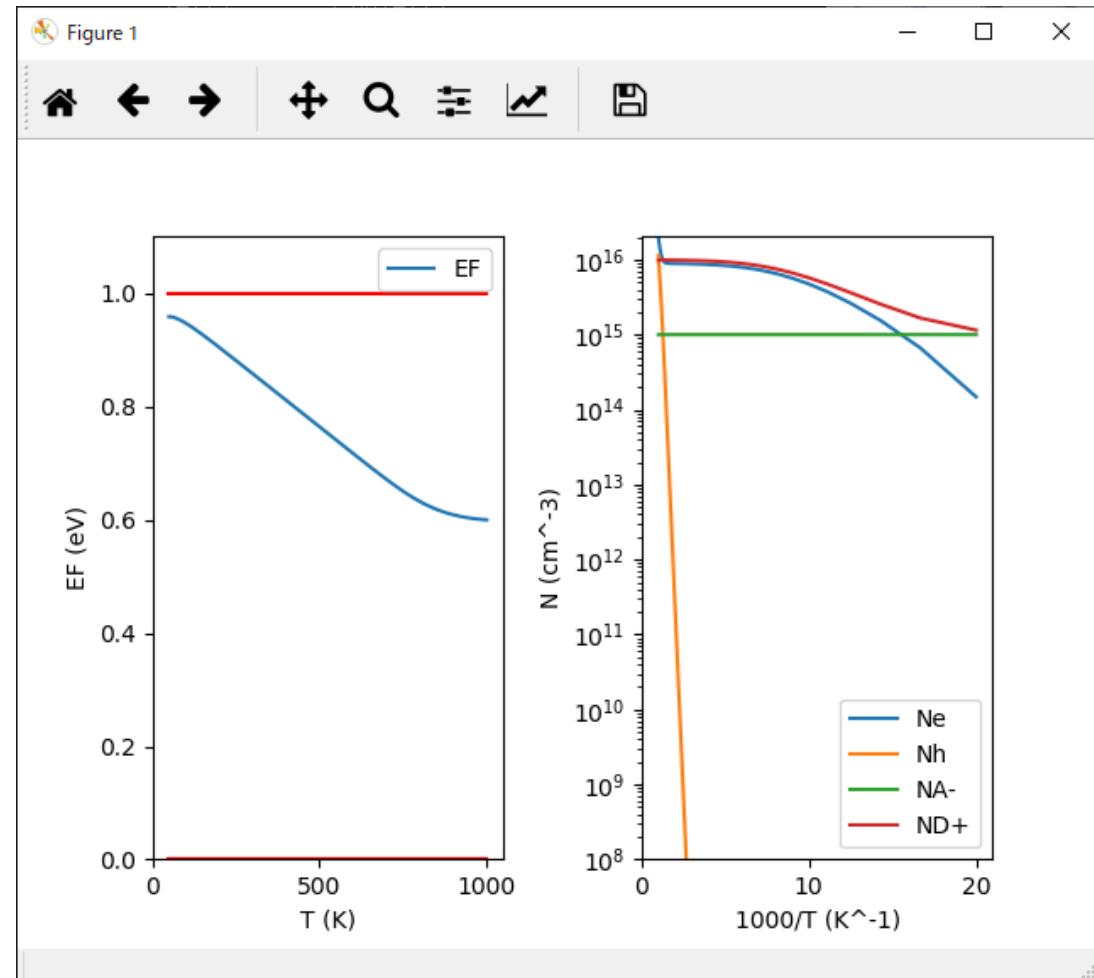
$E_c = 0$ ,  $E_c = 1.0$  eV (= バンドギャップ)

$E_A = 0.05$  eV,  $N_A = 10^{15}$  cm $^{-3}$ ,

$E_D = 0.95$  eV,  $N_D = 10^{16}$  cm $^{-3}$

$N_c = 1.2 \times 10^{19}$  cm $^{-3}$

$N_v = 2.1 \times 10^{18}$  cm $^{-3}$



# Fermiエネルギーの温度依存性

**真性半導体**  $N_D = N_A = 0$

電荷中性条件  $n_e = n_h$

$$N_C \exp(-\beta(E_C - E_F)) = N_V \exp(-\beta(E_F - E_V))$$

$$E_F = \frac{E_V + E_C}{2} + \frac{k_B T}{2} \log \left( \frac{N_V}{N_C} \right)$$

$$n_e = n_h = \sqrt{N_V N_C} \exp \left( -\frac{E_C - E_V}{2k_B T} \right) = \sqrt{N_V N_C} \exp \left( -\frac{E_g}{2k_B T} \right)$$

**N型半導体**  $n_h \sim 0, N_A = 0$

電荷中性条件

$$n_e = N_D^+ \sim N_D \exp(-\beta(E_F - E_D))$$

$$(\beta(E_F - E_D) \gg 1)$$

$$E_F = \frac{E_C + E_D}{2} + \frac{k_B T}{2} \log \left( \frac{N_D}{N_C} \right)$$

$$n_e = \sqrt{N_C N_D} \exp \left( -\frac{E_C - E_D}{2k_B T} \right)$$

**P型半導体**  $n_e \sim 0, N_D = 0$

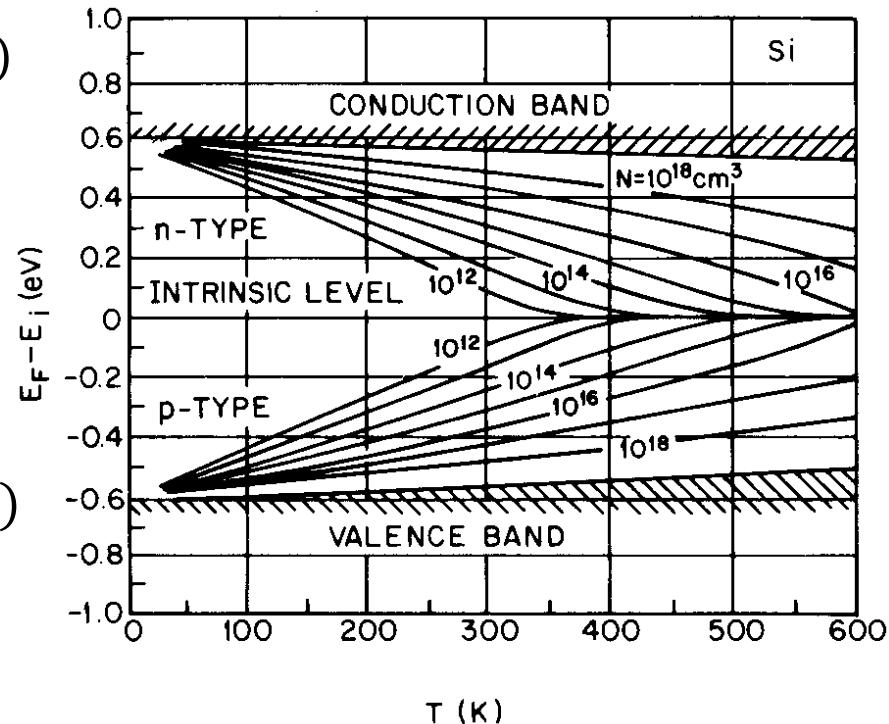
電荷中性条件

$$n_h = N_A^- \sim N_A \exp(-\beta(E_A - E_F))$$

$$(\beta(E_A - E_F) \gg 1)$$

$$E_F = \frac{E_V + E_A}{2} - \frac{k_B T}{2} \log \left( \frac{N_A}{N_V} \right)$$

$$n_h = \sqrt{N_V N_A} \exp \left( -\frac{E_A - E_V}{2k_B T} \right)$$



# キャリア密度の温度依存性とドナー準位

真性領域 – 出払い領域 – 不純物領域

